

弘前大学大学院教育学研究科

学位論文

まち育てにおける創発の形成に関する研究

－関係性が紡ぐ創発の場の可能性－

弘前大学大学院教育学研究科教科教育専攻

家政教育専修 住居学分野

11GP219 成田 梨菜

指導教員：北原 啓司

平成 25 年 1 月

目次

I 序論

- 第1章 研究背景及び目的
- 第2章 先行研究
- 第3章 研究方法

II 本論

第1章 まち育てにおける創発性

第1節 八戸市都心地区再生市民ワークショップにみる先行事例

- (1) 都心地区再生市民ワークショップ
- (2) 平成16～18年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ
- (3) 平成19年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ
- (4) まちなかミュージアムワークショップの結成

第2節 「私」と「公」の関係性が誘う創発性

ー市民主体の新しい活動体mmwsの結成ー

- (1) まち育てにみる公共性

第3節 まち育てにおける創発の意義

第2章 URCA まちづくり企画支援事業における市民活動のアンケート調査

第1節 URCA まちづくり企画支援事業

第2節 アンケート結果と考察

第3節 持続可能な市民活動に向けた創発の可能性

第3章 持続可能な市民活動に向けた取り組み

第1節 名古屋都市センターにおける先行事例

- (1) 名古屋都市センターとは
- (2) 名古屋都市センターにおける市民活動の育成
- (3) 「まちづくりびと養成講座」修了生の現状と課題
- (4) 「まちづくりびと養成講座」における課題

第2節 持続可能な市民活動に向けて

- (1) 名古屋年センターでの新たな取り組み

- (2) まちづくり養成講座における新たな場の提供とその可能性
- (3) 持続可能な市民活動に向けた創発の可能性

第4章 まち育てワークショップと創発の場の形成

第1節 まち育てワークショップの蓄積

ー平成21～23年度八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ事例よりー

第2節 まち育てワークショップから生じた創発

- (1) はっちとつながる「私」
- (2) まちなかキャンパスの開催
- (3) てつがくカフェの新たな展開

第3節 持続可能な市民活動と創発の場の形成

第5章 関係性が紡ぐ創発の場の新たな展開

第1節 新たな創発の場の形成へ

第2節 新たな創発の場の今後の展望

Ⅲ 結論

I. 序論

第1章 研究背景及び目的

第2章 先行研究

第3章 研究方法

第1章 研究の背景及び目的

まち育てとは、まちの課題を見つけて「なんとかする」ために、多様な人が知恵を集めて対応し、そしてまちの魅力を再発見して、さらにそれに磨きをかけながら「どうにかして」まちに活かし育てていくことである。まち育ての中では、この「なんとかする・どうにかする」ために多様な人が知恵を出しあうときに、個人が相互に刺激し合うことで全体として思いもよらなかったものが生み出されるといった創発的な事象がしばしば見られることがある。

創発とは、多くの要因や多用な主体が絡まり合いながら、相互に影響し合っているうちに、ある時にエネルギーの向きが一定方向にそろって、当初は思いもよらなかった結果がポンと現出する現象のことをいう⁽¹⁾。そして、創発という概念は自然科学の分野では昔から注目されてきたものであり、現在では物理学や生物学、情報工学や経営学など様々な分野でそれぞれの定義やそれが起こるプロセスが模索されながら使用されている。

創発という言葉は、たくさんの分野でそれぞれに使用されているが、どの分野も共通して持つ創発とそれが起こるプロセスのイメージがある程度見えてきている。それについて、國領は次のように述べている。

『創発は、「自立した個」が「つながり」の中で相互作用を起こすことで、結果として予期せぬアウトカム（結果）が起こり、そのアウトカムが個にフィードバックされるプロセスとなること想定している。創発とは、この「創発プロセスの中で生まれる新たな価値である」⁽¹⁾』。

まち育てにおいても、この創発のイメージはあてはまるかもしれない。しかし、その言葉に込められたたくさんの意味や創発が起きるプロセスが明確にされないまま使用されている現状に変わりはないだろう。

本研究室では、平成 16 年度から平成 23 年度まで、八戸市で開催された市民参加型のワークショップに継続して関わってきている。そのつながりで、筆者は平成 20 年度からそのワークショップへ参加を始めた。そこでは、ワークショップの中での活動が、ワークショップ終了後もまちなかで持続的に行われ、また、ワークショップでできたつながりを生かして新たな場所で活動を始める人などが現れるなど、最初は想像もしていなかったようなことが次々と起こっていった。それは、まさに創発であり、八戸市で開催されたワークショップでは創発が起こったことにより、ワークショップ終了と共に終わるかもしれない市民活動が、新たに持続性を持って活動していくことができるようになり、多様な人々の関係性も構築され続けている。しかし、市民活動の持続性に目を向けると、どこの自治体でもそれが上手くいっているというわけではない。まちづくりワークショップやまちづくり講座が開催され、そこに市民が参加しても、その後の活動がイベント的なもので終わ

ってしまうことや、次の活動場所が見つけれられないなどの理由から、持続性を持てていないという課題が上がっている。

これらのことを踏まえ、本研究ではまち育てにおける創発がどのようなものなのか、そしてそれが持続可能な市民活動の育成にどのような影響をもたらすのかについて研究していく。

第2章 先行研究

本研究では持続可能な市民活動について2つの先行研究を取り上げる。1つは佐々木望氏の論文『公共的空間がもたらす「参加」の転換—新しい公共による「まち育て」の可能性⁽²⁾』で、もう1つは小山内由希氏の論文「市民活動の持続可能性に関する研究」⁽³⁾だ。まず、佐々木氏の論文の中で、八戸市の調査をもとに、参加型まちづくりから飛び出した市民により結成された新しい活動体についての部分を取り上げる。八戸市では、平成16～19年度にかけて広く市民参加のもと都心地区再生市民ワークショップが行われた。その成果を実践に移そうと、観光ボランティアガイドの瀬川征吉氏と共にまちなかを歩く「まちなかミュージアムツアーwith segawa」というイベントが提案された。そこで、「まちなかミュージアムツアー実行委員会」が立ち上げられ、市民主体の新しい活動体が誕生した。その後、活動体の名を「まちなかミュージアムワークショップ」（以下、mmws と記す）と改め持続的な活動を行っていく。

また、佐々木氏は、「まち育て」の時代に必要とされる公共性を、開かれた「私」が輝きながらその関係性のつながりで「公」が構築されるという発想だとしている。ここでの公共は、国家や政府といった意味を表すタテの公共ではなく、市民・NPO・企業・行政を含めたヨコの公共を意味し、それを新しい公共として定義している。また開かれた「私」とは、学生などの「風の人」⁽⁴⁾、地域に住む「土の人」⁽⁴⁾など多様な人々を表す。そして、市民と行政などのヨコにつながりで結成された mmws は、まさに新しい公共だといえる。

新しい公共は、開かれた「私」の参加を絶え間なく求め続け、また、「私」の想いは、それを受け止めることのできる新しい公共に向かう。このようにして、都市には開かれた「私」を呼び込む新しい公共が次々に誕生して積み重ねられていき、まちが育てられていくという。

本研究では、佐々木氏の研究において述べられている市民参加型のまちづくりから、市民主体の新しい活動体が誕生し、その後、持続的に活動が行われていったことに関して、それが、創発が生じたことに対しての結果であるのではないかという仮説をたて研究を進めていく。後に述べる小山内氏の論文では、市民参加型のまちづくりを行うことや、まちづくり講座の開催だけでは、市民活動に持続性が持たれにくいことが述べられている。八戸市都心地区再生市民ワークショップにおいては、多様な「私」が刺激し合いながら繋がっていく中で創発が生じ、新しい市民の活動体もしくは新しい公共が誕生した。ワークショップ内での市民の活動は、ワークショップ終了と共に無くなってしまうかもしれなかったものである。それが創発により持続性を持って活動していくことが可能となったのではないだろうか。

次に、小山内氏の論文からは、名古屋都市センターにおける公開講座による市民活動の育成の現状と課題について取り上げたい。名古屋都市センターでは、平成17年から「まちづくりびと養成講座」というまちづくりに関する公開講座を開催している。講座の修了生

の中で、希望者は名古屋都市センターの「まちづくりびと」として登録され、情報提供や講座の手伝いをお願いしているという。平成 23 年には修了生を対象に「同窓会&ご意見いただきます会」が開催され、まちづくりびとの現在の活動報告やこれからの活動に必要なことなどを話し合い、そして共有した。そこで明らかになったのが、活動を始めても、その後も活動を上手く続けていくことができていない人が多くいるという現状だったという。名古屋都市センターで講師として関わっている吉村輝彦氏（日本福祉大学 准教授）へのヒアリング調査では、学んだ後にそれを活かす場がないことを問題として取り上げ、講座の後のことを考え、仕掛ける側が学んだことを活かすための場を考えなくてはならないと述べられていた。

小山内氏は、このことから、仕掛ける側が「学びの場」を提供した後にフォローアップをしていくことが重要であると述べている。ワークショップや養成講座のような「学びの場」を提供しても、それだけでは市民活動の持続性は確保できない。イベント的な活動で終わらせないためにも、情報や活動の場を提供するなど、市民が持続的に活動していけるよう育てるためのフォローアップの場が求められるという。

八戸市の事例では、八戸市都心地区再生市民ワークショップとその後の市民活動の持続性という点で成果が見られているのに対し、名古屋都市センターの事例では、まちづくりの講座は開かれているものの、その後の市民活動に持続性を持てていないことが問題視されている。このことから、ワークショップや講座内における多様な人の刺激によって起こる創発は、持続可能な市民活動を育てていくために必要な現象だが、それだけではなく、その後、市民が情報を得たり、活動の場所を探したり、他の団体と繋がることのできる場や、吉村氏のいうフォローアップのような場などを利用した、創発を促す場が必要である。そして、多様な人がそこでつながり、新しいなにかを生み出すかもしれない可能性から、その場を「創発の場」と仮定すると、持続可能な市民活動を育てていくためには「創発の場」の形成が必要なのではないだろうか。

以上、市民活動の持続性に関する 2 つの先行研究を基に、持続可能な市民活動には、ワークショップや養成講座の中で多様な人が相互に刺激し合うことで起こる創発と、ワークショップや講座が終わった後も活動を育てていくための仕掛けとして創発の場の形成が必要であるという仮説をたてた。しかし、まち育てにおける創発とは何で、何処でどのようにして創発が起こっているのかは曖昧である。そこで、本研究では、仮説を証明するために、まち育てにおける創発を定義し何処でどのようにして起こっているのかを事例をもとに明らかにしていく。そして、創発の場の形成とその可能性について考察していく。

第3章 研究方法

■持続可能な市民活動に関する研究方法①（本論 第1章、第2章）

持続可能な市民活動に関する先行研究では、市民参加型のまちづくりワークショップから新しい市民団体が誕生し、その後も持続的に活動が続けていった事例を取り上げている佐々木氏の研究を取りあげ、文献等と合わせながら考察していく。

この事例から、市民活動が持続的に行われていったのは創発が生起した結果ではないかと考え、そこで全国の事例を調査し、八戸の事例が特異なものなのか一般的にこのようなことが起こっているのかを確かめることとした。

全国の事例を調査するにあたって、一般社団法人再開発コーディネーター協会では市民活動の持続性と支援事業の効果を検証するために、支援団体に対してアンケート調査を行うこととなり、本研究室でそのアンケート票の作成および分析を実施させていただくこととなった。この結果を基に全国の持続可能な市民活動と創発の関連性について考察していくこととする。

■アンケート調査（本論 第2章）

上記のアンケートの対象は、社団法人再開発コーディネーター協会によるまちづくり活動への支援として実施された、平成15～19年度にかけて行われた藤田記念まちづくり企画支援事業⁽¹⁾と平成20～24年度にかけて行われたURCA⁽²⁾まちづくり企画支援事業の支援を受けている42の市民活動団体である。調査期間は、2012年12月下旬から2013年1月18日（金）までとした。

なお、18日（金）までに返答があった団体は16団体であり、その後、23日までに追加で9団体から返答があった。しかし、これ以上の追加解答は難しいと思われたため、合計25団体で結果を集計し考察していくこととした。

■持続可能な市民活動に関する研究方法②（本論 第3章）

アンケートの回収率から、返答がなかったほぼ半分の団体が持続的に活動を行えていないのではないかとこの可能性が考えられた。同じように、創発は起こらず、市民の活動も中々続かないという課題を挙げていた名古屋都市センターの事例を取り上げている小山内氏の研究から、その後、課題に対しての新しい動きを追い、創発による持続可能な市民活動の可能性を探っていくこととする。

【調査対象地】

・愛知県名古屋市

名古屋都市センターによる「まちづくりびと養成講座」（平成17年度～）

■創発に関する研究方法（本論 第4章、第5章）

実地調査では、八戸市において、自立した多様な個がつながって相互に作用していく中で創発的事象が見られていることから、継続してそのワークショップに関わっていくことで、そこで起こる創発を見つけていくこととする。また、当事者としてそのような「場」に参加していくことで、その過程で生じた創発的な事象に関わっていき、関係者へのヒアリングや、その経験から得られた知見をもとに「創発の場」の形成について考察していく。

実地調査においては、了承を得たうえでデジタルカメラによる撮影を行い、また、ヒアリングでも了承を得たうえで録音機器を用いて記録した。

【調査対象地・事例】

・青森県八戸市

都心地区再生市民ワークショップ（平成16～19年度）

まちなか再生市民ワークショップ（平成20年度）

中心市街地活性化市民ワークショップ（平成21～23年度）

*なお、当事者としてワークショップに参加したのは平成20年度からである。

【調査日時及びヒアリング対象者】

ワークショップの変化やそこで生じた創発的事象に関わっていると考えられる、八戸市都心地区再生、まちなか再生、中心市街地活性化市民ワークショップの参加者で、mmwsのメンバーである5人の方たちをヒアリング対象者とした。

日時：2013年1月16日（水）

対象：里山夢食堂 代表 赤坂美千子氏

八戸ポータルミュージアム「はっち」 コーディネーター 柳沢拓哉氏

日時：2013年1月17日（木）

対象：八戸大学 教授 田中哲氏

㈱石万 代表取締役 石橋司氏

日時：2013年1月18日（金）

対象：八戸工業高等専門学校 教授 河村信治氏

*調査日を1月に集中させた理由は、八戸市での平成23年度中心市街地活性化市民ワークショップ終了後のmmwsやてつがくカフェがどのように動いていくのか、またそこで創発が起きうるのかを知るために、調査期間ギリギリまで待って行ったことによるものである。

参考・引用文献及び注釈

- (1) 國領二郎．(2006)．創発しようぜ！創発を誘発する空間設計．國領二郎編．創発す

- る社会. 日経 BP 企画. 第 2 章 : 28-45.
- (2) 佐々木望. (2009). 『公共的空間がもたらす「参加」の転換—新しい公共による「まち育て」の可能性』. 弘前大学教育学部
 - (3) 小山内由希. (2012). 「市民活動の持続可能性に関する研究」. 弘前大学教育学部
 - (4) 風の人とは、その地域の外から来た人のことで、例えば学生や観光者、旅行者、アーティストなどのことを表し、土の人とは、その地域に住んでいる人のことを表す言葉として用いられている。
 - (5) 藤田記念まちづくり企画支援事業については本論の第 2 章で詳しく取り扱う
 - (6) URCA まちづくり企画支援事業については本論の第 2 章で詳しく取り扱う

Ⅱ．本論

第1章 まち育てにおける創発性

第1節 八戸市都心地区再生市民ワークショップにみる先行事例

- (1) 都心地区再生市民ワークショップ
- (2) 平成16～18年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ
- (3) 平成19年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ

第2節 「私」と「公」の関係性が誘う創発性

ー市民主体の新しい活動体mmwsの結成ー

- (1) まち育てにみる公共性
- (2) まちなかミュージアムワークショップ結成
- (3) まち育てにおける創発性の意義

第1章 まち育てにおける創発性

第1節 八戸市都心地区再生市民ワークショップにみる先行事例

(1) 都心地区再生市民ワークショップ

八戸市では、中心市街地の空洞化・商業機能の低下などの現状を受けて、2004年5月に市庁内に「都心地区再生プロジェクト」が立ち上げられた。同年8月には「八戸市中心市街地活性化基本計画」をもとに、緊急に実施する必要があると考えられる10の施策「都心地区再生プロジェクト事業計画書」が取りまとめられた。この施策をより効果的に進めるために、また、中心市街地にそれぞれ思い入れのある市民の声をまちづくりに反映していくことが、中心市街地の活性化のために必須と考えられ「都心地区再生市民ワークショップ」が企画された。広く市民参加のもと、中心市街地の良い点・悪い点を洗い出し、問題点を整理して対応策を検討することを目的に、平成16年度に始まり平成19年度まで検討が重ねられてきた。

(2) 平成16年度～18年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ

平成16～18年度にかけて行われた市民ワークショップでは、八戸市都市政策課が主管課となり、年に6回ほどの回数が設けられ、集まった市民によってグループ毎のテーマに沿った検討がなされた。実施状況及び検討テーマは下記の表1～6の通りである。

ところで、ワークショップという言葉は、かなり広い意味で使われている。辞書による定義で、第1の意味は「仕事場、作業場」となっている。これは、もともとの英語の“workshop”の原義である。さらに、『広辞苑』では、「所定の課題について事前研究の結果を持ち寄って、討議を重ねる形の研修会。教員・社会教育指導者の研修や企業教育に採用されることが多い」とある。ここから、参加者が自ら討議を重ねる「参加型の研修の場」の意味として使われていることがわかる。また、ワークショップは「参加体験型グループ学習」と訳されることもある。従来の教育で、教える側から学ぶ側への一方通行的な知識伝達型と違って、ワークショップでは、双方向的な「参加型」の学びを大切にするという。⁽¹⁾

仕事場や作業場の意味があることから、ワークショップは参加型の会議や研修の手法・道具という意味だけでなく、場としての意味も持つといえる。ワークショップは、市民参加の手法・道具として捉えられがちだが、場としての可能性も秘めているといえる。そして、一方通行の知識伝達ではなく、双方向的な学びを大切にすることから、最初から決まった結末が決められていて、そこに向かって進んでいくといった予定調和ではなく、双方向だからこそでてくる想定外が歓迎される。また、同じ内容のワークショップはなく、目的によって中身やワークショップの持つ意味が変化していく。

八戸市での都心地区再生市民ワークショップからは、後に創発が起こり新しい活動体が誕生することから、ワークショップ内で創発につながる何かがあったと考え、それを探っ

ていく必要がある。そこで、ここからは年度毎のワークショップの内容とその変化を追い、創発ワークショップとの関連性を捉えていくこととする。

<表 1：平成 16 年度 都心地区再生市民ワークショップ実施状況>⁽²⁾

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 16 年度 11 月 13 日（土） 13～16 時	八戸市庁別館 2 階 会議室 C	基調講座、グループ分け、 自己紹介、今後の予定
第 2 回	平成 16 年度 12 月 18 日（土） 13～16 時	八戸市公民館 1 階講義室	街角探検（タウンウォッチング） 都心地区の「良い点」・ 「悪い点」洗い出し
第 3 回	平成 17 年度 1 月 18 日（土） 13～16 時	八戸市公民館 1 階講義室	グループ毎に対応策を検討
第 4 回	平成 17 年度 2 月 5 日（土） 13 時～16 時	八戸市公民館 2 階会議室 1, 2, 3	ワークショップのまとめ、 検討結果の発表

<表 2：平成 16 年度 都心地区再生市民ワークショップ検討テーマ>⁽²⁾

	検討テーマ	ファシリテーター
A	まちなか巡りと会所場づくりによる活性化	（株）EX 都市研究所
B	インナーリング道路のあり方とモール化の可能性	八戸市都市政策課
C	まちづくり条例制定に向けて	八戸市都市政策課
D	本八戸駅通り地区のまちづくり	本八戸駅通りまちづくり ワーキング座長
E	旧市民病院跡地の活用と周辺のまちづくり	八戸市都市政策課

平成 16 年度のワークショップ開催当初は、アドバイザーはいるものの、一般市民も学生も商業関係者も行政も皆が初心者であり、手探りで始めていった。後に、一貫して市民ワークショップに主体的に参加し、市民団体「まちなかミュージアムワークショップ」を設立し代表となる石橋司氏（株式会社石万代表取締役）は、「中心市街地のまちづくりで市民の声を聞くことはとんでもないことだ」と、最初は非常にけんか腰で参加したという。石橋氏は、当時、地元の町内で公共事業を巡ってのトラブルがあり、商店主や地主、住民などの多種多様な人の間でその意見を聞くことの大変さを実感していた。「そんなに上手くいくはずないよ」という気持ちで参加していたという。それが、ワークショップの回数を重ねていく毎に人の意見を聞くことに対し「タフになっていった」という。また、河村信治氏（八戸工業高等専門学校教授）によるワークショップの説明があり、会議との違いもは

つきりし、ワークショップの有効性を知り、今では会社でワークショップの形式を使わなければとも考えているという。ワークショップの積み重ねで、最初はとんでもないと思っていたことに徐々にはまっていき、楽しくなっていた。これもまた、他者となつたり、最初は考えもしなかったような価値観の変化が起こったという点では創発なのかもしれない。この部分については、あとの章で考えていきたい。

まず、平成 16 年度はワークショップ最初の年ということもあり、アイデアを集めて模造紙に書いていき、最後に発表することで情報の共有をするというやり方をしていた。内容は、最初から予定されていたものに沿って行われていった。

<表 3：平成 17 年度 都心地区再生市民ワークショップ実施状況⁽³⁾>

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 17 年 5 月 21 日（土） 13～16 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ分け、自己紹介、 今後の活動イメージ
第 2 回	平成 17 年 6 月 18 日（土） 13～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎のワークショップ 作業
第 3 回	平成 17 年 7 月 16 日（土） 13～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎のワークショップ 作業
第 4 回	平成 17 年 8 月 27 日（土） 13～16 時	八戸市公会堂 文化ホール	検討結果の中間発表
第 5 回	平成 17 年 9 月 17 日（土） 13～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎のワークショップ 作業
第 6 回	平成 17 年 10 月 8 日（土） 13～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎のワークショップ 作業
第 7 回	平成 17 年 11 月 12 日（土） 13～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎のワークショップ 作業
第 8 回	平成 17 年 12 月 17 日（土） 13～17 時	八戸グランド ホテル	ワークショップのまとめ、 検討結果の最終発表

<表 4：平成 17 年度 都心地区再生市民ワークショップ検討テーマ⁽³⁾>

	検討テーマ	ファシリテーター
A	まちなかめぐりと会所場づくりによる活性化	都市政策課
B	歩行者空間の創造に向けて	都市政策課
C	まちづくり条例制定に向けて	都市政策課

D	本八戸駅とおり地区のまちづくり	本八戸駅どおりまちづくりワーキング座長
E	旧市民病院跡地の活用と周辺のまちづくり	都市政策課
F	廿三日町地区のまちづくり	都市政策課

平成 17 年度は、16 年度とやり方はほぼ同じであるが、回数がとても多くなったことと、市民自らがテーマに向けてどのように作業していけばいいのか考えながら活動していたのが特徴的である。

第 1～3 回目は、グループ毎のワークショップ作業となり、第 4 回目で各グループがそれまでの検討作業を一般市民の前でプレゼンテーションするといった中間発表を行っている。そして、第 5～7 回目は検討成果を基に再びワークショップ作業を行い、第 8 回目で最終発表を行った。

<表 5：平成 18 年度 都心地区再生市民ワークショップ実施状況⁽⁴⁾>

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 18 年 6 月 10 日（土） 13 時 30 分～16 時 30 分	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ分け、自己紹介、 今後の活動について
第 2 回	平成 18 年 7 月 8 日（土） 13 時 30 分～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎に ワークショップ作業
第 3 回	平成 18 年 8 月 19 日（土） 13 時 30 分～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎に ワークショップ作業
第 4 回	平成 18 年 10 月 7 日（土） 13 時 30 分～17 時	八戸市庁別館 2 階会議室 C	グループ毎に ワークショップ作業
第 5 回	平成 18 年 11 月 3 日（土） 13 時 30 分～17 時 30 分	八戸グランドホテル	まちなか再生市民フェスタ 「市民参観日」グループ発表
第 6 回	平成 18 年 12 月 9 日（土） 13 時 30 分～	八戸市庁別館 2 階会議室 C	ワークショップのまとめ、 検討結果の最終発表、今後の 展望について
			関係各所に提案書の提出

<表 6：平成 18 年度 都心地区再生市民ワークショップ検討テーマ⁽⁴⁾>

	検討テーマ	ファシリテーター
A1	まちなか巡りと会所場づくりによる活性化	八戸大学教授
A2		都市政策課
A3		都市政策課

B1	都心居住の推進について	商店主
B2		商店主
C1	まちなか再生における市民活動団体について	協議会事業推進員
C2		商業関係者
D	都心地区周辺のまちづくり	八戸高専助教授

平成 18 年度のワークショップでは、ファシリテーターに主催者である行政だけでなく、市民も入り、行政がそのサポートに回ったということが大きく変わった点である。これまでは、ファシリテーターのほとんどを行政が担当していたので、行政が市民を導く形が意図せずできあがっていたといえる。しかし、18 年度からはそこに市民も入ることで、行政と市民に横のつながりができ、これまでの行政と市民の縦の関係という意識が少し変化したのではないだろうか。また、開催予定が 5 回であったのに対し、実際は 6 回目も開催されている。最終発表では報告・発表会にとどまらず、自分たちで次へ動いていこうという思いもでてきていた。そして、実際にまちにでて見つけたものを話し合い、それらをまとめたものを提案書として関係各所に提出している。この頃から、予定調和の乱れがみられはじめ、形式的ではない本来のワークショップらしさが現出してきたように感じられる。

(3) 平成 19 年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ

平成 19 年度の都心地区再生市民ワークショップから方針が大きく変更された。これまで、行政が主体となってワークショップを行っていたが、この年度から市民が主体となって活動していくこととなる。会場も中心市街地の市民が活動拠点としている「エスタシオン」を多く使うようになった。実施状況及び検討テーマは以下の表 7、8 に示す通りである。

＜表 7：平成 19 年度 八戸市都心地区再生市民ワークショップ実施状況＞⁽⁵⁾

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 19 年 6 月 2 日（土） 13 時 30 分～17 時	エスタシオン 2 階	グループ分け、 検討作業
第 2 回	平成 19 年 7 月 28 日（土） 13 時 30 分～17 時	天聖寺ホール	検討作業
第 3 回	平成 19 年 9 月 15 日（土） 13 時 30 分～17 時	エスタシオン 2 階	検討作業
第 4 回	平成 19 年 10 月 27 日（土） 13 時 30 分～17 時	エスタシオン 2 階	検討作業
第 5 回	平成 19 年 12 月 8 日（土） 13 時 30 分～17 時	天聖寺ホール	検討作業

第6回	平成20年1月26日（土） 13時30分～17時	天聖寺ホール	まとめ作業
-----	-----------------------------	--------	-------

＜表8：平成19年度 八戸市都心地区再生市民ワークショップ検討テーマ⁽⁵⁾＞

	検討テーマ	ファシリテーター
A	まちなか目的別マップの作成	八戸大学教授
B	まちなかにおける市民活動団体を支援する 環境整備	商業関係者
C	インターネットによる市民参加の推進	NPO 法人
D	既存街路の魅力づくりに取り組む	八戸高専准教授

ワークショップの内容も、模造紙にテーマに対する意見を書くだけではなく、自分たちが実際にまちで動いていこうとしたときに、その仕掛けや工夫を考えるなどの内容に変わった。Bグループの「まちなかにおける市民活動団体を支援する環境整備」では、最終発表でワークショップの成果を実践に移そうと、観光ボランティアガイドの瀬川征吉氏と共にまちを歩く「まちなかミュージアムツアーwith segawa」の開催を提案した（図1）。開催にあたり、市民主体の活動団体「まちなかミュージアム実行委員会」を立ち上げた。市民の新しい活動体の誕生である。

瀬川氏は、元々観光ボランティアガイドとして市内各地で活躍されていたが、ワークショップに参加したことで学生や商業関係者や、大学関係者などとの出逢いのきっかけもつことができた。そこで、私的にやっていた活動やその活動に対する想いが、他の「私」たちとのつながりによってたくさんの人を巻き込みながらまちなかに開かれていくこととなる。そして、「公」が構築されていくことにより瀬川氏は新たな活動の場を得て輝きだしていく。この活動体が行ったイベントは、市民主体の活動の第一歩である。そして、まちなかミュージアム実行委員会が主体となって、平成20年度はまちなか再生市民ワークショップを企画するなど、様々な活動を推し進めていく。

＜エスタシオン → 八戸ポータルミュージアム プロジェクト＞

まちなか ミュージアムツアー

～ with Segawa

八戸中心市街地の観光地(ミュージアム)を観光案内人(Segawa セガワ)と巡ってまちなかの歴史を体感してみよう！

せんべいカフェ
さばだしラーメン
新しい八戸の味を
体験してみよう



● コース

南部会館 → おがみ神社 → 八戸城跡(三八城公園) → 八戸市庁 → ジドバ夢ホール
(展望台 & 会議室) (旧タケダスポーツ4F)

開催日時：平成20年4月29日(火) 同日イベント(市民と花のカーニバル)

10:00～13:30

(受付9:30～ ツアー開始10:00)

集合場所：南部会館

募集人数：30～50名(先着50名 事前申し込み)

参加費：500円(さばだしラーメンあり)

持参する物：携帯電話または デジタルカメラ

● お申し込み & お問い合わせ先

まちなかミュージアム実行委員会

事務局：八戸市総合政策部

中心市街地活性化推進室(福島)

tel.0178-43-2111(内線 336)

fax.0178-47-1485



案内人 Segawa
市民ガイド八戸協会

* このツアーの企画・運営は、平成19年度 八戸市民WS発起のBグループ「まちなかにおける市民活動団体を支援する環境整備」が行っております。

図1：「まちなかミュージアムツアーwith Segawa」の開催案内

(4) まちなかミュージアムワークショップの結成

「まちなかミュージアムツアー実行委員会」は、その後平成 20 年に「まちなかミュージアムワークショップ」（以下、mmws と記す）と名称を改め、継続的な活動を行っていく。mmws という活動体は、活動によって主体が変化するという、流動的で柔軟な組織のスタイルをとっている。次に、mmws の活動実績を紹介する。

<活動実績>

◆主催事業

①まちなかミュージアムツアー

日時：平成 20 年 4 月 29 日（火）10 時～13 時 30 分

参加者：43 名（ツアー参加者） 140 名（イベント・展示参加者）

概要：まちなかミュージアムワークショップとして初の企画

②本八戸・内丸地区のまち歩き MAP をつくろう（図 2、3）

日時：平成 20 年 9 月 6 日（土）10 時～14 時

参加者：20 名

概要：八戸中心街の表玄関、本八戸駅界隈の活性化を検討するワークショップの開催

③バイク MAP 作成ツーリングワークショップ

日時：平成 20 年 9 月 7 日（日）9 時～15 時

参加者：10 名

概要：自転車により、中心街と八戸市内を結ぶ MAP をつくるための体験学習を実施。

④中心街歴史講演会～市日町はちのへ再考～

日時：平成 20 年 10 月 7 日（火）18 時 30 分～20 時

参加者：38 名

概要：八戸中心街の特徴である〇日町という、市日町の歴史について学ぶ

⑤まちなかミュージアムフェスタ 2008（図 4）

日時：平成 20 年 11 月 2 日（土）、3 日（日）

参加者：360 名（全イベント参加者）

概要：八戸市主催の基調講演以外のツアー、討論会、食のイベントなどを自主企画

⑥まちなか卒論発表会

日時：平成 21 年 2 月 27 日（金）18 時～19 時 30 分

参加者：52 名

概要：中心街のまちづくりに関わってきた学生を招き、卒論の特別発表会を企画

◆共済事業

①「大正の広重」吉田初三郎ちようと鳥瞰図展@三春屋百貨店

日時：平成 20 年 6 月 19 日～23 日

共済：中合三春屋店、種差観光協会

②中心街写真展「まちはアート」

日時：平成 20 年 11 月

共済：市民ガイドはちのへ協会、週刊八戸



図 2：本八戸・内丸地区のまち歩き

MAP をつくろう 「まち歩き」



図 3：本八戸・内丸地区のまち歩き

MAP をつくろう 「見つけたものの共有」



図 4：まちなかミュージアムフェスタ 2008

キャンドルナイト

mmws は、設立後、まちなかミュージアムツアーにとどまらず、マップづくり、歴史講演会など多種多様な活動を実験的に行ってきた。これらの活動は「八戸ポータルミュージアムはっち」の開館を見据え（平成 23 年 2 月開館）、どのようにしてそこを活用していくかについて考えた上でのものであった。また、平成 21 年度八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ の開催を、ワークショップ経験者として、また、ファシリテーターとして支援していくなど、その活動の幅を広げていく。

平成 16～19 年度のワークショップでは、最初は予定された内容に沿った形式的なワーク

ショップが行われていたのに対して、18 年度には予定回数を超えてワークショップを開催しようといった動きがあったことや、ファシリテーターに市民が入りワークショップが終了しても活動を行こうという想いが生まれてくるなど、予定調和的な内容に乱れが見え始めていった。これは、行政から市民への一方的な知識伝達型という形から、行政も市民も横につながって双方向的な参加が実際に行われていったことによる本来のワークショップの意味、そして魅力が現出してきたことによる変化なのではないだろうか。そして、この変化が見られ始めた後にワークショップの場から創発も起こっている。

ワークショップの本来の意味を実際に参加の場に引き出すことでそれが創発につながっていく可能性が考えられる。

第2節 「私」と「公」の関係性が誘う創発性

ー市民主体の新しい活動体mmwsの結成ー

(1) まち育てにみる公共性

本研究で使用される「公」と「私」、そして「公共性」をここで定義しておく。まず、先行研究において佐々木氏は、「私」とは、そこに住んでいる土の人や外からきた風の人など多様な人を想定しており、「公」とは、そのような多様な「私」の欲や強い思いなどの集積や、「私」同士のつながりによって構築されるものであるとしている⁽⁶⁾。

また、まち育てを実践している弘前大学教授の北原啓司氏は『「私」が輝きながら、「私」同士の関係性の広がりとして「公」が構築されていくという中国由来の考え方は、「まち育て」の発想にそのままつながるものだ』と述べている⁽⁷⁾。

まち育てにおける「公」と「私」について、北原氏と佐々木氏の発想から、本研究では多用な人、その土地に住む土の人、外から来る風の人を「私」とし、「私」同士のつながりから「公」が構築されるという意味で「公」を用いていく。そして、先ほど出てきた市民の新しい活動体のように、「私」同士の関係性から新しく誕生する活動体だけが「公」というわけではない。「公」は人々のつながりである。また、このつながりの「公」は人々の集合体である共同体とは意味を別にする。斎藤純一氏（早稲田大学教授）によれば、共同体とは、①閉じた領域であり、②等質な価値に充たされた空間であり、③何らかのアイデンティティを持ち、④一元的・排他的に帰属が求められるものだ⁽⁸⁾という。後で述べる公共性とはまったく逆の意味を持っているという。

公共性について、斎藤氏（早稲田大学教授）は、①公共性は誰もがアクセスできる開かれた空間であり、②公共性は複数の価値や意見の間に生成する空間であり、③公共性は、何らかのアイデンティティが制覇する空間ではなく、差異を条件とする言説の空間であり、④公共性は、一元的・排他的な帰属を求めないと言っている⁽⁸⁾。

このことから、公共性は差異を受け止めることのできる、誰にでも開かれた空間であることがわかり、公共性とは多様な「私」の存在を受け止めることのできる空間であるとわかる。つながりの「公」は、このような公共性を持った人々のつながりだといえる。

瀬川氏の事例においても、個人で活動していたものが、ワークショップにおいて多様な「私」と出逢い、相互に刺激を与え合うことでつながりの「公」が構築され、新たな活動の場所でさらに「私」として輝きを大きくしながら活動していくことができるようになった。たくさんの個人の中に埋もれてしまうのではなく、自分の想いを前面にだしながら、それでもつながっていくことのできる「私」とそこから構築される「公」の関係性は、自立した個がつながりの中で相互作用を起こすことで、思いもしなかった結果がでてくるといった創発という現象を誘発していくための重要な関係性だといえる。

第3節 まち育てにおける創発の意義

先行研究で取り上げた佐々木氏の研究では、開かれた「私」の想いが「公」に向かうという発想を持つ。具体的にいうと、「私」がそれまで個人的に行っていた活動やその思い（閉じられた思い）が、ワークショップに参加し多様な「私」と出逢ったことで外に開かれていく。そして、その想いが「公」（mmws）に向かうというものである。

しかし、開かれた「私」について、土の人や風の人といった多様な人という定義をとっているが、「開かれた」がどういうことを指すのかが曖昧である。そして、開かれて思いが外に向かうだけでは mmws は誕生しない。

ここで、「私」が開かれるとは、たくさんの「私」とつながり、絡まり、想いをぶつけ合うといったこと起こっていることを表すのではないだろうか。その中で創発が起こり、mmws という「私」の想いを受け止めることのできる新しい活動体が誕生し活動も続いていったと考える。

ところで、八戸市都心地区再生市民ワークショップでは、本来は、ワークショップ終了と共に、その中で行われていた市民の活動も終了していたかもしれない。しかし、実際は mmws という市民団体がワークショップから飛び出して、活動を継続させている。このように、まち育てにおけるワークショップ中で創発が起こったことにより、市民の新しい活動団体が誕生し、持続的に市民活動を行っていくことができるようになった。

北原氏によれば、まちづくりの現場では、これまでお金を払っている人や行政だけが意見を言うことを認められ、市民の参加は限られていたという⁽⁶⁾。しかし、まち育ては、誰もが多様なスタイルでまちと関わることを前提とした考え方であり、それは「私」や「欲」とつながっていてもいいという考え方を持つ。

また、そのようなまち育ての考えが根付いたワークショップは、決まった答に導くように話し合う予定調和的な、あるいは形式的な参加の場ではなく、相互に学び合う中ででてきたものが想定外のことで歓迎されるような参加の場といえる。そして、多様な人の参加を前提とし、また想定外の出来事も許容される。八戸市の都心地区再生市民ワークショップでは、最初のうちは予定された内容に沿って、市民も行政も探り探りで進めていったが、回数が積み重ねられていくうちに、市民自らテーマに向けてそれぞれにどう活動していくかを考えていくようになり、自分たちで次へ動いていこうという意見もでてきた。ワークショップで予定調和に乱れが見え始めても、想定外のことが起こっても、自然とそれが受け入れられていった。こうした動きが見られたことから、八戸都心地区再生市民ワークショップには、まち育ての考えが根付きはじめていたといえる。

そして、創発は、何が起こるかわからなくても、想定外のことが起こってもそれを歓迎することのできるまち育ての考えが根付いた場所でこそ起こる。まちづくりの考えでは創発は起こらない。

なぜなら、國領氏（慶應義塾大学 SFC 研究所所長）の言う、創発における「自立した個」

のつながり⁽⁹⁾とは、まち育ての中では、自分の想いを前面に出して周りとなつなっていくことのできる「私」にあたる。つまり、「私」がつながり「公」が構築されていく中で、「私」同士の前面に出した想いが相互に作用し、創発が起こっている。まちづくりの考えによる限られた参加の場合は、「自立した個」のつながりも限定され、自分の想いや欲も抑制されるだろう。そうした場では、相互に想いをぶつけていくことは難しく、そして、思いもよらないようなこと、創発は起こりにくい。

こうした、まち育てにおける創発は、結果としてワークショップから新たな市民の活動団体を誕生させ、市民活動に持続性を持たせることを可能にした。「私」が相互につながり刺激しあうことで、結果として市民活動に新しい動きを生じさせ、持続可能な市民活動の第一歩を踏み出すきっかけをつくったといえる。これを、まち育てにおける創発の数ある中の意義の1つとして捉えたい。

参考・引用文献

- (1) 中野民夫. (2001). ワークショップー新しい学びと創造の場ー. 岩波書店.
- (2) 八戸市. (2007. 6. 8). 平成 16 年度都心地区再生市民ワークショップ開催レポート. (<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,788,18,1,html>). 2013. 1. 23 取得
- (3) 八戸市. (2008. 3. 28). 平成 17 年度都心地区再生市民ワークショップ開催レポート. (<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,798,18,1,html>). 2013. 1. 23 取得
- (4) 八戸市. (2007. 6. 8). 平成 18 年度都心地区再生市民ワークショップ開催レポート. (<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,805,18,1,html>). 2013. 1. 23 取得
- (5) 八戸市. (2010. 8. 20). 平成 19 年度都心地区再生市民ワークショップ開催レポート. (<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,3394,18,html>). 2013. 1. 23 取得
- (6) 佐々木望. (2009). 『公共的空間がもたらす「参加」の転換ー新しい公共による「まち育て」の可能性』. 弘前大学教育学部
- (7) 北原啓司. (2009). まち育てのススメ. 弘前大学出版会
- (8) 斎藤純一. (2000). 思考のフロンティア 公共性. 岩波書店.
- (9) 國領二郎. (2006). 創発しようぜ! 創発を誘発する空間設計. 國領二郎編. 創発する社会. 日経 BP 企画.

Ⅱ．本論

第2章 URCA まちづくり企画支援事業における市民活動のアンケート調査

第1節 URCA まちづくり企画支援事業

第2節 アンケート結果と考察

第3節 持続可能な市民活動に向けた創発の可能性

第2章 URCA まちづくり企画支援事業における市民活動のアンケート調査

第1章では、八戸市の事例を取りあげ、そこではまち育ての考えが根付いた参加型市民ワークショップで多様な「私」同士が相互につながり刺激し合っていくことで創発が起これ、市民活動が持続的に行われていくことが可能となった。まち育てにおける創発が関連しているが、持続可能な市民活動の育成という視点でみると一定の成果があったといえる。

しかし、八戸市でのこの事例が全国の市民活動からみて特異なことなのか、それとも普通一般的に起こっていることなのかがわからない。そこで第2章では、全国の市民活動の持続性と創発の関連性を調査していくこととする。他の事例を見ていくことで、八戸市での事例に客観性を持たせることができ、また、持続可能な市民活動と創発の関連性についてもより明らかにしていくことが可能と考える。

全国の事例を調査するにあたって、一般社団法人再開発コーディネーター協会（以下、協会と記す）が行うまちづくり企画支援事業を受けている市民活動団体を見ていくこととする。協会では市民活動の持続性と支援事業の効果を検証するために、支援団体に対してアンケート調査を行うこととなり、本研究室でそのアンケート票の作成および分析を実施させていただくこととなった。この結果を基にして全国の持続可能な市民活動と創発の関連性について考察していくこととする。

第1節 URCA まちづくり企画支援事業

(1) URCA⁽¹⁾ まちづくり企画支援事業とは

一般社団法人再開発コーディネーター協会による、まちづくり活動への支援として、これまでに関西活性化支援事業（平成16～18年度）や藤田記念まちづくり企画支援事業（平成15～19年度）が実施されてきた。これらは、地域の活性化活動の支援でもあり、「URCA まちづくり企画支援事業」は、関西活性化支援事業と藤田記念まちづくり企画支援事業の趣旨を引き継ぐ形で平成20年度に創設された。その後5年間にわたって実施されている。

藤田記念まちづくり企画支援事業とは、まちづくりに携わる専門家の職能の確立及び商店街などの地域に立脚した創造的なまちづくりの推進に尽力された故藤田邦昭氏（元協会副会長）のご遺族等からの寄付金を活用して、地域住民や企業、専門家、行政などによる創意あふれるまちづくりの企画を募集し、まちづくりに寄与すると期待される地区を選定し支援していくものである⁽²⁾。

その趣旨を引き継ぐURCA まちづくり企画支援事業の特徴は、①市街地の活性化へ向け継続した活動を行う団体が実施する事業、②意欲的で、創意工夫のある事業を支援対象としていることである。

① 支援対象団体

市街地において地域の活性化、まちづくりなどを継続的に行っている、または行うとしている団体などを対象とする。法人格の有無は問わない。NPO、協議会、組合、任意の団体などいずれでも事業への応募が可能である。

② 支援対象事業

支援対象団体が活動対象としている地区において、地区の活性化を目的として実施する事業を支援する。事業内容は、ハード整備からイベントなどのソフト事業など幅広く対象としており、特に地域の活性化に意欲的で創意工夫のあることが望まれる。

③ 支援内容

事業実施の支援金を供与する。金額は、総額 100 万円で複数の事業が選定された場合は、合わせて 100 万円の範囲内となる。平成 20 年度は 5 団体、21 年度は 6 団体、22 年度は 5 団体、23 年度は 5 団体が選定されている。

第2節 アンケート調査による結果と考察

(1) アンケート趣旨

市民活動の継続性と支援事業の効果を検証するために社団法人再開発コーディネーター協会では、支援事業を受けている活動団体を対象にアンケート調査をすることとなり、本研究室がそのアンケート票の作成および分析を実施することとなった。全国での市民活動の事例とその継続性について検証できるため、本研究ではアンケート結果をもとに、持続可能な市民活動についての考察を行っていく。

なお、調査に使用したアンケート用紙 2 枚は巻末に付属資料として載せるものとする。また、支援対象団体は下記の表 1 に示すとおりである。

表 1: 対象団体一覧

[illegible]

(3) アンケート結果

アンケート対象：42 団体・・・返答 25 団体（回収率約 60%）

組織形態：・・・自治体、組合、NPO、企業、グループ、その他（任意団体など）

調査時期：2012 年 12 月下旬～2013 年 1 月下旬

アンケート締切りを 2013 年 1 月 18 日（金）としたが、その時点での返答が 16 団体であった。その後、23 日（水）までに追加で 9 団体の返答があり、これ以上の追加解答は難しいと思われたため、合計 25 団体で結果を集計していくこととした。

結果は、回答数をまとめた表 2～7 と、全体の集計結果をまとめた表 8～11 を下記にまとめた。

【回答数】

＜表 2＞ 1. 申請時からその後どのような変化が生じているか。

	回答数
1、申請時とまったく変わることなく、活動を続けている	9
2、活動団体としては継続しているが、申請時に比べて活動、メンバーとも少なくなっている。	2
3、活動メンバー数は、むしろ申請時よりも増加して、活性化している	10
4、団体としての役割を終え、活動は終了している	1
5、メンバーの中で志向性の違い等により、しばらく休止している	1
6、以前の団体から飛び出す形で、新たなメンバーを含めて異なる団体として活動している	0
7、その他	2
計	25

＜表 3＞ 2. 支援事業への申込みの動機

	回答数
1、以前から自分たちで活動を進めていたが、資金的にも苦しい部分があり、団体の活動が支援事業の目的に適応していると考えて、応募した	21
2、とにかく、応募できるものは片っ端から申請して、決まっている自分たちの団体の活動の資金繰りに活かすことにしており、支援事業の目的に合いそうな所を申請書に記入した。	0
3、以前から団体そのものは結成していたが、現実的な活動になかなか取り掛かりにくい状況にあり、この支援事業に対する応募によって、何らかの活動を始めるきっかけにしたい。	1
4、その他	3
計	25

＜表 4＞ 3. この支援事業は、団体の活動に役立ったか

1、大変役にたった	22
2、役に立った	3

3、あまり役に立たなかった	0
4、役に立たなかった	0
5、その他	0
計	25

<表 5> 4. その後の活動について。支援事業の成果を踏まえ、その後はどう展開しているか

	回答数
1、成果を踏まえて支援対象事業を継続的な取り組みとして進めてきている	21
2、少しの間は続けたが、その後は実施していない	4
3、支援事業が終了した後は、その活動は行っていない	0
計	25

<表 6> 4 - 2. 上の設問で 2 と 3 を選んだ団体のみ、それは何故か

	回答数
1、そもそも、支援事業によって活動は終了しており、継続の必要性がなかったから	1
2、経済的な側面が弱くなったために、活動を続けたくても不可能であった	0
3、その他	3
計	4

<表 7> 4 - 3. 支援事業の成果を活かして、次の取り組みに進んだか

	回答数
1、新たな展開を始めることとなった	18
2、特に、新たな取り組みには至っていない	7
計	25

＜表 8＞集計表 1

団体名	1. 貴団体について 貴団体は、申請時からその趣向のようになされた活動が主です。下から一歩近いものを、一つ選んで〇をつけて下さい。	2. おおむねの期間 ★相互支援事業に必要ない理由をお聞かせください。下から一歩近いものを、一つ選んで〇をつけて下さい。	3. 支援事業について (1) 当協会の支援事業は、貴団体の活動の役にたっています。	(2) 上の期間で、そのようにして活動された活動を、貴団体の活動におおむねおこなっています。	(3) 相互支援事業で、金銭面以外で役に立った点が、お聞かせください。	(4) 相互支援事業に、おこなった活動は、お聞かせください。	(5) 相互支援事業の活動が、おこなった活動は、お聞かせください。	(6) 相互支援事業の活動が、おこなった活動は、お聞かせください。	(7) 上の期間で、そのようにして活動された活動を、貴団体の活動におおむねおこなっています。	(8) 上の期間で、そのようにして活動された活動を、貴団体の活動におおむねおこなっています。
NPO法人 さえき	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
特定非営利 活動法人 田舎LOVE R's	③	①	①	①	①	①	①	①	①	①
NPO法人ASO 田舎空間 情報	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
資金運用 会	⑤	①	①	①	①	①	①	①	①	①
NPO法人 ちおこし・ はにやう市 場	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
ハカタ・リ バクル・ プラン	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
結核の 治療 会	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
結核の 治療 会	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①

表9-2 集計表

[illegible]

表10-3

[illegible]

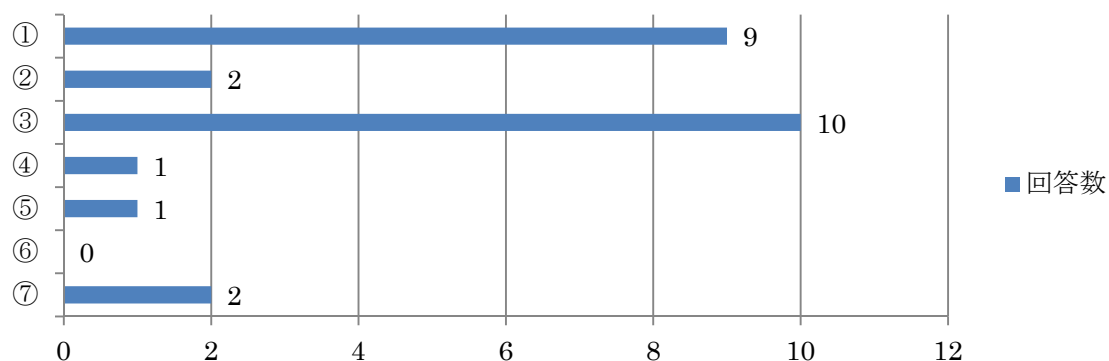
＜表11＞集計表4

[illegible]

(4) 結果のまとめ

<1. 申請時からその後どのような変化が生じているか>

<グラフ1> 1. 回答数

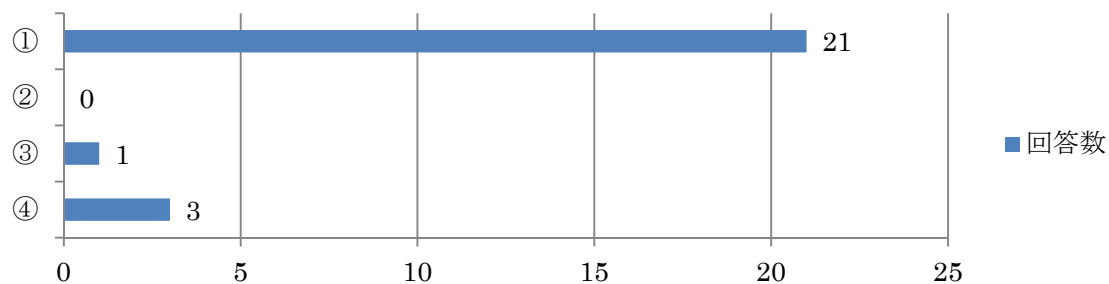


グラフ1より、申請時よりも活動が活発になった団体が10団体で、変わらず活動を続けている団体が9団体あることがわかる。また、その他の意見から、一部の活動は休止しているが、会の活動は継続していると回答した団体が1団体と、メンバーは少なくなったが続けている団体が2団体あり、申請時から活動を継続している団体は21団体あることがわかる。

残りの4団体は、活動休止と、支援事業での活動が終了し今後の継続の必要性がないことから活動を終了している。

<2. 支援事業への申込みの動機>

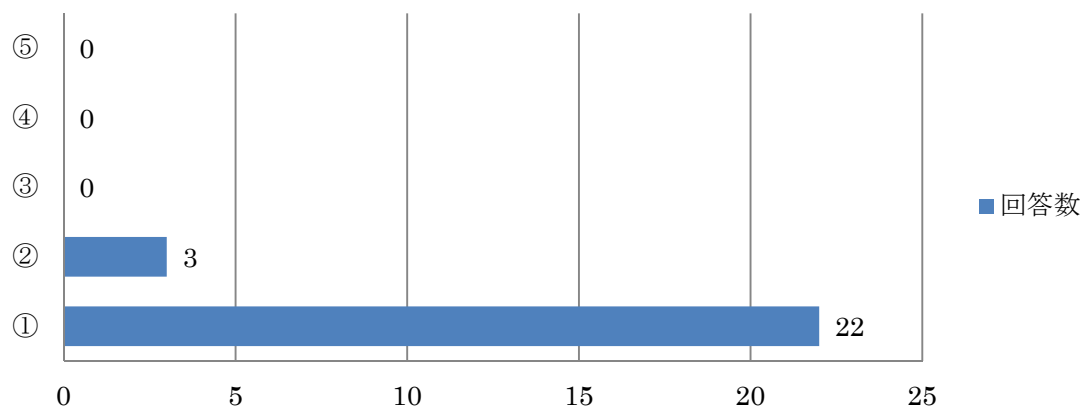
<グラフ2> 2. 回答数



グラフ2より、以前から活動を進めていたが資金面が苦しいと答えた団体が21団体あり、活動を始めるきっかけにと回答した団体が1団体、その他が3団体あったことがわかる。

<3. この支援事業は、団体の活動に役立ったか>

<グラフ3> 3. 回答数



グラフ3より、大変役に立ったが22団体、役に立ったが3団体で、全ての団体が支援事業を何らかの形で役に立ったと感じていることがわかる。

<3-2. 上の設問で、そのように判断された理由>

【資金面の支援】

・活動の幅が広がった・活動がよりよくなった・完成させることができた・苦労が解消した・取り組むことができた・厚みがでた・使うことができた・つなげることができたなど、ほとんどの団体が資金面で役に立ったと感じている。

<3-3. 支援事業で、金銭面以外で役にたったことについて>

- ・支援を受けたことが社会的評価につながった
- ・会員のモチベーションアップにつながった
- ・社会的にも活動自体にも信頼性が高まった
- ・成果物を新聞で取り上げてもらい、広報につながった

など、一般社団法人再開発コーディネーター協会は全国的にも信頼性が高く、そこから支援事業を受けることができたということが、活動に対する地域社会の中での信頼を高め、また会員のモチベーションアップにもつながった。

<3-4. 支援事業の評価できる点>

- ・赴いてのプレゼンテーションがないので、活動に専念できる
- ・支援対象が限定されず、自由な企画で応募できた
- ・申請書や報告書が簡易で事務負担が少なくてよかった
- ・過去の実績や組織形態が審査対象にならないので、応募しやすかった
- ・学生という身分でも活動の支援をしてくれた

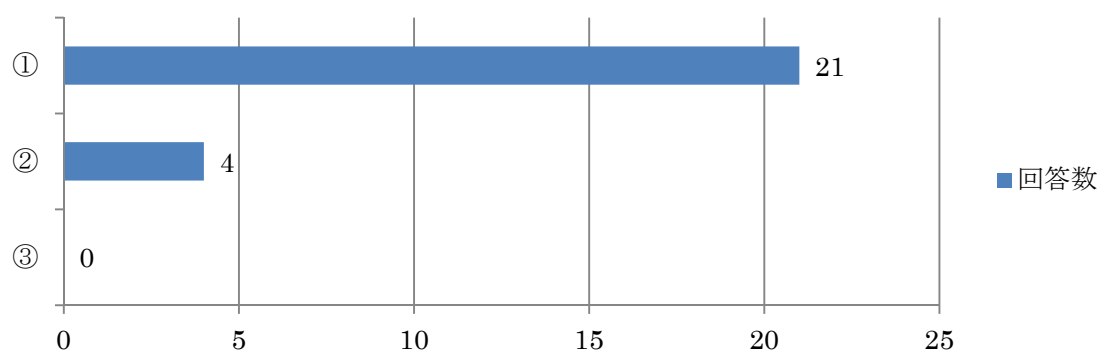
・活動など未経験の法人でも支援を受けることができた
など、事務処理が簡易で負荷が少なかったことと、過去の実績や身分を取り払って活動
みしてくれているという点で評価されている。

<3—5. 支援事業の改善点>

- ・自立できるまでの支援がほしい
- ・助成団体同士での活動や課題の共有などを行いたい
- ・活動の拡大とともに、助成金額を 50 万、100 万単位でできるようにしてほしい
- ・選定にあたって、HP の紹介だけでなく、賞状など、何か証明するものを頂けると次の活動への理解が得られやすい。
- ・プレゼンテーションをさせてほしい。またその場で、専門家の意見も聞きたい
- ・情報発信など、良い意味での関与がもう少しほしい

<4—1. その後の活動について、支援事業の成果を踏まえ、どう展開しているか>

<グラフ4> 4—1. 回答数



グラフ 4 より、支援が終わっても対象支援事業を継続している団体が 21 団体、少しの間は継続したが、その後は実施していないが 4 団体で、どの団体も支援が終了しても活動を続けようという意思がある、またはあったことがわかる。

<4—2. 上の設問で 2 と 3 を選んだ団体のみ、それは何故か>

上の設問で 2 を選択した 4 団体のうち、1 つの団体は**援事業によって活動は終了しており、継続の必要性がなかったから**と回答している。その他の意見では、**人材不足や地震の影響、中心的人物が活動を続けられなくなったため**と回答されていた。

<4—3. 支援事業の成果を活かして、次の取り組みに進みましたか>

18 団体が新たな展開に踏み出しており、残り 7 団体は特に新たな取り組みはしていない。

<4—4. 上の設問で1の方は、具体的にご紹介ください>

内容を見ると、新たな展開として進んでいくうえで、人数や団体数の増加や、大学などとの連携、そしてより大きな規模の活動を行うなどの変化が見られている。また、批判されていた活動が、継続して街なかで活動していたということで評価されるようになったことや、新たにメディアの活用を考えている団体、NPOとして法人格を取得し活動の幅を広げている団体もある。

(5) 考察

結果から、最初に注目したい項目は2点ある。それは、質問1の市民活動における申請時からの変化と、2点目は、質問4の支援事業終了後の市民活動の継続性についてである。

この2点を見ていくうえで、持続可能な市民活動に必要なものとは何かをアンケート結果から考察していきたい。

質問1と4から、市民活動を継続的に行えなかった理由をはっきりさせる。質問1で、変わらず活動を継続している、以前よりも活性化したと答えている団体も、いつ、どのような理由で活動が行えなくなるかわからない。もし、それが回避可能なこと、もしくは克服できるものなら、それらが持続可能な市民活動の育成に活かせるはずである。

また、質問4については、支援の有無が持続可能な市民活動にどう関係するののかも見ていく。助成金をもらって、資金に余裕ができて新しい活動や、活動の幅が広がった団体が、その後、支援が終わってもさらに新しいことに取り組んでいける理由について明らかにする。経済的な面の強弱で持続可能な市民活動が育っていくかどうかが決まってしまうのだろうか。本当の意味で、持続可能な市民活動の育成に必要なことがでてくるはずである。

【活動の持続性に必要なもの】

まず、質問1で、

選択肢④団体としての役割を終え、活動は終了している

選択肢⑤メンバーの中での志向性の違いなどにより、しばらく活動を休止している

選択肢⑦その他

の何れかを答えた「黄金通り会」「特定非営利活動法人調布まちづくりの会」「あそぼう広場」「久々原マップをつくろう会」の4団体を見ていく。

「黄金通り会」選択肢⑤

黄金通り会では、通り会に加入される方はいるが、その活動に参加される方が少ないという課題が述べられていた。そして、質問2で、支援事業を受けた理由について、活動を始めるきっかけとして、また、助成金を活用することで町をPRすることができるということをわかってもらう機会を作ったからだと答えている。しかし、支援を受けて努力はしたが課題に変化は見られず、町の人の意識の変化が起きてほしいと考えて、一度活動

を休止することとなった。

「特定非営利活動法人 調布まちづくりの会」選択肢⑦

調布まちづくりの会では、会の活動の内、支援対象事業に関わる「まちのバリアフリー部会」が休止しているが、会そのものは活動を続けているという。質問 4—1 から、その活動は、少しは続いていたことがわかる。しかし、人材不足と部会の中心的人物が活動を続けられなくなったことで、その後の実施ができなくなった。

「あそぼう広場」選択肢⑦

あそぼう広場では、地震の関係で、メンバーの家庭の事情と、場所の確保が難しく休止していたという。しかし、調布まちづくりの会と同様質問 4—1 から、その活動は、少しは続いていたことはわかる。その後は、地震の関係から縮小して活動を継続しているという。また、団体のある地域に児童館が新設されたので、そこを軸に活動にシフトしていこうとしている。

「久々原まちづくりマップをつくろう会」選択肢④

久々原まちづくりマップをつくろう会では、団体として役割を終え活動は終了しているという。質問 4—2 でも、支援事業によって活動は終了しており、継続性の必要性はないという風に回答している。

以上、4 団体についてまとめたが、市民活動を継続的に行えなくなった理由はそれぞれに違ったものだった。「黄金通り会」では、加入はするが参加が少ないという人の意識の問題、「調布まちづくりの会」では、人材不足と部会の中心人物の欠如、「あそぼう広場」では、災害により場所とメンバーの確保が困難になったという問題、「久々原マップをつくろう会」では、支援事業による会の目的が達成され、その後継続性の必要性がなかったということだった。

質問 1 からわかる継続性についての課題は、大きくわけて 2 点である。1 点目が「人」の課題で、2 点目が「環境」の課題である。「人」についての課題は、その人の意識の問題、人材不足の問題、中心人物についての問題で、「環境」についての課題は、災害があげられる。

この災害について、「あそぼう広場」では、後に新たな場所の確保をし、メンバーもそこを軸として縮小しながらも活動にシフトしていつているという。場所の確保によりメンバーが軸となって活動する場が設けられれば、その活動を続けられるという可能性がある。

そこで、やはり課題として挙げられるのは、団体メンバーとなった人の意識と人員数、そして中心人物についてなど「人」についての課題であろう。

ここで、視点を変えて質問 1 で、
選択肢②活動団体としては継続しているが、申請時に比べ活動、メンバーとも少なくなっている

を選んだ、『町おこし団体「九条下町ツアー」』と「JAM」の 2 団体から、人員や活動が少なくなってきた理由や、それでも続いている理由をみていくことで、「人」の課題についてもう少し踏み込んで考えていきたい。

『町おこし団体「九条下町ツアー」』（以下、九条下町ツアー）選択肢②

創立 1,997 年

構成人数 14 人

この団体は、②を選んだ理由にシニアガイドが多いため、後継者を育てるのに苦勞していると答えている。また、質問 4—1 と 4—3 で活動は継続して進めているが、新たな取り組みはしていないと答えている。

「JAM」選択肢②

創立 2003 年

構成人数 9 人

この団体は、作業必要時などに、必要に応じて活動をしている。活動は、空き地を借りて公園として整備するものだ。そして、質問 4—3 で①を選択しており、新たな展開を始めていることがわかる。今現在、その地域において大きな都市計画事業が行われており、その一角を借りて公園整備ができないか話あっているという。

「九条下町ツアー」では、新たに「人」の課題として世代が挙げられたが、それを克服するために後継者を育てようといった想いを伺うことができた。また、「JAM」では、現在メンバーは少なくなったとあるが、必要時には人が集まることと、そのメンバーで新たな取り組みも始められていることから、本当にその活動が好きな人だけが残って、個々がより主体的に動いて活動を続けているのではないだろうか。

このことから考えられるのが、人員が少なくなっても、それを克服していくことや、本当にその活動に想いのある人がいれば活動が続き新たな取り組みだって始めることができるということである。また、「JAM」のように、主体的に動くことのできる人達がいるのであれば、会の代表人物はいるかもしれないが、もし、その人がいなくても活動を続けることが可能なかもしれない。

以上を踏まえて、このアンケートからいえる持続可能な市民活動の育成に必要なことは、まずはその活動が好きなこと、そして、メンバーの活動をするための軸となる場と、主体性を持って活動に取り組む気持ちである。誰かにまかせるというより、「私がやる」といった気持ちで活動に臨むことで活動日に一人誰かいないことがあっても活動は続けていくこ

とができるはずである。そして、後継者・想いを継ぐ人を育てていくことが必要である。

【支援の資金の有無と市民活動の持続可能性の関係性】

次に、質問 4 について、支援の有無が持続可能な市民活動にどう関係するののかも見ていく。ここで、支援事業が終了しても活動を継続していると答えている団体が 21 団体ある。また、質問 4-3 で「新しい展開を始めている」選択した団体は 18 団体ある。活動場所を地域の中に広げていたり、一年限定がその後も続いていたたり、NPO となって今までできなかったことを事業化してすすめていたりそれぞれの団体で様々に展開している。その中で、ハカタ・リバイバルプランという団体は、大学や博物館との連携が叶い、元々の活動を発展させて行っているという。そして、支援事業の資金はそのきっかけをつくってくれたのだという。

資金を得たことで、活動に余裕がもてたことや、活動の質を上げることにつながっている団体は他にもいるだろう。市民活動を有意義に行うには資金の必要性もあるのかもしれない。そこで、先の 21 団体が、どういう理由で支援事業に応募したのかを質問 2 から確認する。

質問 2 で、21 団体のうち選択肢①を選んだのは 18 団体、④を選んだのが 3 団体あった。ほとんどの活動団体が資金的に苦しいという理由での応募だった中、その他を選んだ「越前市四町」「冒険あそび場—せんだい・みやぎ連絡会—」「KOKO プレス」の意見がどのようなものかみていく。

「越前市四町まちづくり協議会」行政と一体になって活動しており、行政からの紹介で応募。事業費の大半がまちづくり交付金からでるので、それ以外で自分たちが自由にできる資金を得ることができたので、自主事業をはじめることができた。

「冒険あそび場—せんだい・みやぎ連絡会—」財政基盤が弱く運営の基礎を作りたい。

「KOKO プレス」自己資金だけで、助成をうけられなくてもやるつもりだったが、よりよいものを作るために応募した。

という意見であった。どの活動も、資金を得ることを目的にする、あるいは支援事業に頼るという目的ではなく、それを得ることでもっと活動を良くしたいといった気持ちの方が強くあるように感じる。KOKO プレスという団体では、資金がなくても自分たちでやっていこうとしていた。

これらのことから、支援事業による資金は、活動をより有意義なものにするのに対しての必要性はあるが、持続的な活動をしていく上で依存するもの、絶対的に必要なものではないということがわかった。むしろ、支援による資金がないと活動が続けられないのであれば、その団体は支援がなくなった途端に終了してしまうといった問題がでてきてしまう。

支援に頼らなくても活動が続けていけるのが理想だが、質問 2 からわかるように、市民活動は資金のやり繰りが非常に厳しいことがわかる。まずは、資金を補助的に活用して、徐々に自立していけるような仕組みづくり、または、他の団体とのつながりづくりや行政・大学・企業などとの連携を考えていく必要もあるかもしれない。

(6) まとめ

考察から、持続可能な市民活動に必要なことは、メンバーが活動するための軸となる場、だれか一人が中心となってというよりも、皆が主体的に活動に取り組むこと、後継者、または主体的に活動できる人材を育てることである。そして、これらのことから、メンバーが少なくても、災害があっても、リーダーに何かあっても活動が続いていくためには、縦割りのつながりではなく、ネットワーク的な誰とでも柔軟につながることのできるつながりが必要である。

また、持続可能な市民活動には、支援による資金は絶対的に必要ではない。市民活動は資金のやり繰りが大変で、活動を有意義なものにするには必要かもしれない。実際、資金があることで、新しい活動の展開が生じるなど、創発的なことを起こすきっかけともなっている。しかし、それがなくても、自分たちで頑張ろうという意気込みの団体もあり、むしろ、そういった団体を応援することがより持続可能な市民活動を育てていくことにつながっていくはずである。第 5 章で、そうした資金云々よりも自分たちでどうやって活動が続けていくかを悩み、そして新たな展開を始めようと頑張っている市民活動の事例を紹介する。

支援による資金は、活動をしていく中で創発が起こるような場をつくるきっかけとして必要なかもしれない。資金を得たことをきっかけに、ハカタ・リバイバルプランは大学や博物館と共同で活動を行えるようになり、元々の活動も発展的に行えるようになったという。このようなつながりや新しい展開ができたのも、一種の創発である。市民活動を持続的に行っていくためには、そうした新しい展開を生み出すことのできる場の形成が必要である。

このアンケート結果から、八戸市での創発による持続可能な市民活動の事例は特異な事例ではなく、全国の市民活動の中でも起こっていることだとわかった。

しかし、アンケートに答えた団体は全体の 6 割であり、その中で活動が続いていると答えた団体は 8 割である。アンケートの返答がない 4 割の団体と先ほどの活動が終了している 2 割の団体を合わせて全体の半分ほどの市民団体の活動が続いてないという可能性が考えられる。そこで、次の章では小山内氏の研究で取り上げられている、市民活動の持続性のなさについて課題を挙げていた名古屋都市センターの事例を見ていくこととする。名古屋都市センターでは、その後、活動の持続性という課題に対して新しい取り組みが行われているため、そこから創発と持続可能な市民活動の育成についてのより具体的な可能性を探っていくこととする。

参考文献・HP

- (1) Urban Renewal Coordinator Association of JAPAN
- (2) 一般社団法人再開発コーディネーター協会. 藤田記念まちづくり企画支援事業.
(<http://www.urca.or.jp/info/fujitakinen/index.html>). 2013. 1. 22 取得

Ⅱ．本論

第3章 持続可能な市民活動に向けた取り組み

第1節 名古屋都市センターにおける先行事例

- (1) 名古屋都市センターとは
- (2) 名古屋都市センターにおける市民活動の育成
- (3) 「まちづくりびと養成講座」修了生の現状と課題
- (4) 「まちづくりびと養成講座」における課題

第2節 持続可能な市民活動に向けて

- (1) 名古屋年センターでの新たな取り組み
- (2) まちづくり養成講座における新たな場の提供とその可能性
- (3) 持続可能な市民活動に向けた創発の可能性

第3章 持続可能な市民活動に向けた取り組み

八戸市の事例は、ワークショップの開催とその積み重ねでまち育ての考えが根付いたことで、創発が起こり、新しい市民の活動団体が結成され、市民活動が持続的に活動していくことができるようになった点で成果があったといえる。しかし、全ての自治体で市民活動が持続性を持って活動していくことに成功しているわけではない。前の章からも、アンケート調査の対象団体の約半分が活動を持続的に行えていないかもしれないという可能性が見られた。

この章では、ワークショップから派生した市民活動がワークショップ終了とともにその活動を終了させてしまうことや、まちづくり講座に参加して、まちづくりへの意欲が湧いても次の活動場所が見つけられないなど、市民が活動を上手く持続できていないという課題を挙げた名古屋都市センターの事例を小山内氏の研究⁽¹⁾からとり挙げる。そして、第1章で述べた、八戸市の事例と比較しながら、創発と持続可能な市民活動の育成の可能性について考察していく。

第1節 名古屋都市センターにおける先行事例

(1) 名古屋都市センターとは

「財団法人名古屋都市整備公社名古屋都市センター」とは、「まちづくりのシンクタンク、交流活動拠点、情報発信拠点」として、名古屋に関わるまちづくり、都市計画を支援するため、平成3年7月に設立された。調査研究や交流事業を担う事務所や研究室の他に、まちづくりライブラリー、まちづくり展示空間、会議室などが整備された施設を運営しており、まちづくりびと養成講座や講演会などを開催し、市民と行政の橋渡し役として市民主体のまちづくり活動の支援を行っている⁽²⁾。

(2) 名古屋都市センターにおける市民活動の育成

名古屋都市センターでは、「まちづくりびと養成講座」というまちづくりに関する公開講座を平成17年から開催している。年に数回開催されるこの講座は、まちづくりとは何かというところから入り、実際に街歩きをしてまちの魅力や課題を整理し、将来のまちの姿を思い描き、今やるべきことを考えていくという流れで開催されているものが多い。講座を開催することで、市民がまちづくりに関わる活動のきっかけをつくっている。そして、講座の修了生で希望者がいれば、名古屋都市センターの「まちづくりびと」として登録してもらい、各種情報提供や、講座のお手伝いをお願いするなど、市民活動の育成・サポート⁽¹⁾をしている。

(3)「まちづくりびと養成講座」修了生の現状と課題

「まちづくりびと養成講座」を始めて7年目の平成23年には、「まちづくりびと」の登録者は120人を超える人数になったという。そこで、名古屋都市センターでは、「まちづくりびと」を対象に、「同窓会&ご意見いただきます会」を2回開催した。

<実施状況>

第1回 同窓会&ご意見いただきます会

日時：平成23年7月23日 13時～17時

第2回 同窓会&ご意見いただきます会

日時：平成23年7月27日 18時30分～21時

内容は、今までの講座の振り返りを行い、まちづくりびとのそれぞれの現在の活動報告、これからの活動に必要なことなどを話し合い、参加者で情報を共有するというものだ。参加人数は、「まちづくりびと」として登録している120名を超える人のうち、両日合わせて41名であり、日程が合わないために参加できなかった人もいたが、全体の3割ほどとなった。

参加者の中で、有意義な会であったと答える声がある一方で、参加した全員が講座を活かす現場を持っているわけではないということが判明した。講座を開催し、意欲のある人たちが「まちづくりびと」となってきたが、その全員が講座を活かして活動をする⁽¹⁾ことができず、また活動を始めても継続できていない人が多いという。

(4)「まちづくりびと養成講座」における課題

小山内氏による、名古屋都市センターで講師として関わっている吉村輝彦氏（日本福祉大学 准教授）へのヒアリング調査では、公開講座における課題と今後の展望が聞かれていた。吉村氏は、平成23年に開催した「同窓会&ご意見いただきます会」の現状から、「どこの地域でも、講座を仕掛ける側は、学んだことをどう活かすか、活かす現場をどうつくるかについてまで考えられていないということが課題である。講座の後のことを考え、仕掛ける側が、現場づくりや実践フィールドの発掘を行い、学んだことを活かすための仕掛けを考えていかなければならない」とおっしゃっていたという⁽¹⁾。

このことから、小山内氏は公開講座から継続した市民活動が育たない理由に、学んだことを実践する場がみつけれられていないことを挙げ、講座を開催する側がそれをどうフォローアップしていくかということを今後の課題として挙げている。

第2節 持続可能な市民活動に向けて

(1) 名古屋都市センターでの新たな取り組み

1、“まちづくりびと” ステップアップ講座の開催

“まちづくりびと”のスキルアップを目的とし、市民が活躍する場で実践してもらうことを目的に開催された。

<実施状況⁽²⁾>

第1回 “まちづくりびと” ステップアップ講座 会議ファシリテーターの心得と技法 第1弾

開催：平成23年10月2日

第2回 “まちづくりびと” ステップアップ講座 ファシリテーション・グラフィック 第2弾
～話しあいの見える化～

開催：平成23年12月4日、12月7日

第3回 “まちづくりびと” ステップアップ講座 ファシリテーションとグラフィック 第3弾

開催：平成24年2月5日

第4回 “まちづくりびと” ステップアップ講座 応用&ケーススタディ編 第1弾

開催：平成24年9月2日

2、まちづくりびとサロンの開催

「まちづくりびと」の登録をしている方及び名古屋市内を中心に地域でまちづくり活動を行っている団体等で、交流会を開催した。「まちづくりびと」や助成団体が、気軽に寄れて、意見交換や情報提供できる場を設けてみるということで試行的に開催された。

<実施状況⁽²⁾>

第1回 まちづくりびとサロン

開催：平成24年7月10日

第2回 まちづくりびとサロン

開催：平成24年7月13日

第3回 まちづくりびとサロン

開催：平成24年9月21日

“まちづくりびと” ステップアップ講座により、「まちづくりびと」たちのスキルアップのための場ができた。名古屋都市センターは、「同窓会&ご意見いただきます会」から、講座修了生の現状を目の当たりにし、実際に当事者である修了生の意見を収集した。それに基づいて、「まちづくりびと」のスキルアップを目的としたステップアップ講座を開講した。吉村氏（日本福祉大学 准教授）は、今後は、講座だけではなく、実践フィールドの発掘

もしていかななくてはならないが、これらすべてを名古屋都市センターが実施することは難しいので、例えば行政が講座を開催し、名古屋都市センターがフィールドを発掘するという風にして、行政と都市センターが連携し、市民活動を育てていきたいと考えているようだ。

そして、まちづくりサロンの開催により、「まちづくりびと」同士、また、「まちづくりびと」と他の市民活動団体が交流や情報共有などができる場ができた。今後は、そこでつながった「まちづくりびと」たちによって新たな活動が始まり、また、それを持続させていくことが期待される。

(2) 公開講座における新たな場の提供とその可能性

名古屋都市センターの事例では、公開講座に参加し、まちづくりに意欲が湧いて「まちづくりびと」に登録しても、その後の活動の場を見つけないことができないなどの理由から、市民活動を持続的にやっていくことができないという課題があった

八戸市の都心地区再生市民ワークショップの事例では、「私」同士のつながりが「公」として構築されていくなかで、「私」がその想いを前面に出しながらも、相互につながっていくことで創発が起こり、市民の新しい活動体が誕生した。もしかすると、ワークショップ終了と共に、その中で行われていた市民の活動も終了していたかもしれない。しかし、実際は mmws としてワークショップから飛び出して、活動を持続させている。このように、まち育てをしていく中で創発が起こったことにより、市民の新しい活動団体が誕生し、そして、持続的に市民活動を行っていけるようになった。

しかし、八戸市の事例においても、最初から参加した人たちが「私」として自分の想いを出せていたわけではない。第1章でも述べたが、最初は皆が初心者で、探り探りで始めていった。石橋氏（株式会社 石万 代表取締役）においては、けんか腰での参加であったという。そのような中で、回数を重ねていくうちに、ワークショップやまちづくりのことを学び、「私」の想いをだしながらもつながっていけるようになったのだ。

名古屋都市センターの事例でも、公開講座の積み重ねがあり、「まちづくりびと」の登録者も年々増加している。まちづくりに意欲的な人が増えてきている。そして、この「まちづくりびと」は個人が講座で学んだことを活かして、自由に、そして、想いを前面に出して動いていける人たちである。「まちづくりびと」が集まれば、相互に意見を出し合う中で創発が起こるだろう。何が起こるかはわからないが、もしかしたら、市民活動を持続的にやっていくことが可能になるかもしれないし、まったく新しい活動体ができ、その活動がスタートするかもしれない。

しかし、「まちづくりびと」の集まる「場」が今までなかった。名古屋都市センターの事例を見ると、“まちづくりびと”養成講座ではたくさんの講座が開かれている。そのほとんどが、まちづくりに対する学びや、スキルアップといった内容である。近年、その中で、「同窓会&ご意見いただきます会」や「まちづくりサロン」のように、まちづくりびとが集ま

り、情報を共有し、そして次の活動の機会を探ることのできるような講座による場の提供が始まった。今後は、その場を活かして「まちづくりびと」が想いをぶつけながらつながり、そして創発が起こって新しい動きがでてくるのではないだろうか。

(3) 持続可能な市民活動に向けた創発の可能性

2つの事例から、持続可能な市民活動を育てていくためには、創発を促す場が必要である。名古屋都市センターでは、創発を促す場として、まちづくりサロンを講座として提供している。「まちづくりびと」が集まることによって、創発が起れば、市民活動に新たな動きが見えてくるようになるだろう。

八戸市の事例では、創発が起こり、市民の新しい活動体が結成され、市民活動を持続的に行えるようになったかもしれないが、その後もずっと同じ状況で持続していけるかはわからない。名古屋都市センターの事例のように、活動の場が見つからず、活動体自体がなくなってしまうこともあるかもしれない。

そうならないためにも、ワークショップで少しでもまちのことを考えた「私」や、まちに住む人やまちの外から来る人も巻き込んでいけるような「創発の場」が必要である。そこは、「私」が再び集まって、つながりながら、想いをぶつけ合っていくことで創発が起き、市民の新しい動きが始まっていく場である。このような、創発を起こすことのできる場を持つことで、市民は躍動感をもって活動していくことができるだろうし、それが持続可能な市民活動を育てることにつながっていくと期待したい。

この創発の場と、その形成に関する可能性は第4章と第5章で述べたいと思う。

参考・引用文献、HP

- (1) 小山内由希. (2012). 「市民活動の持続可能性に関する研究」. 弘前大学教育学部
- (2) 名古屋都市センター. 地域の“まちづくりびと”養成講座.
(<http://www.nui.or.jp/machi/index.html>). 2013. 1. 23 取得

Ⅱ．本論

第4章 まち育てワークショップと創発の場の形成

第1節まち育てワークショップの蓄積

ー平成21～23年度八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ事例より

ー

第2節まち育てワークショップから生じた創発

- (1) はっちとつながる「私」
- (2) まちなかキャンパスの開催
- (3) てつがくカフェの新たな展開

第3節持続可能な市民活動と創発の場の形成

第4章 まち育てワークショップと創発の場の形成

第4章では、現在「創発の場」がすでに形成されつつある八戸市において、平成21年度以降にどのような創発が生じたのかをまとめ、そこから見えてきた「創発の場」について、どのような場なのか考察していく。

筆者自身が当事者として平成21年度～23年度の八戸市中心市街地活性化市民ワークショップに参加した体験から、創発が起こる可能性のある場に自ら入っていくことで、そこで得られた知見をもとに創発の場の形成に関して考察していく。

第1節 まち育てワークショップの蓄積

ー平成21～23年度八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ事例よりー

(1) 八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ

「八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ（以降、中活ワークショップと記す）」とは、平成21～23年度に開催され、中心市街地活性化のため、各テーマに基づき、広く市民参加のもと自主的な活動を展開し、市民と行政の協働により、効果的な中心市街地の活性化策の実施に向けての取り組みである。

八戸市では、もともと中活ワークショップ以前に、平成16年度から平成19年度まで「八戸市都心地区再生市民ワークショップ」を開催していた。

平成16～18年度にかけては、八戸市都市政策課の主催で、一般公募によって集まった市民があらかじめ決められていたテーマを選択し、グループごとにテーマに沿った検討がなされた。平成18年度のワークショップ終了後には、これまで検討されてきた提案を基に提案書を作成し、八戸市や八戸商工会議所、八戸中心商業街区活性化協議会へ提出した。その提案書の中から、実際にまちづくりに活かされているものもあり、都心地区再生市民ワークショップで出された提案は、八戸市のまちづくりに実際に役立つものが多くあった。平成18年度までは、主に提案等のテーマ検討を重視していたが、提案書提出後の平成19年度のワークショップは、市民が主体となって、これまで検討してきた案を市民の力で実践・活動することを重視するものとなった。この「都心地区再生市民ワークショップ」は平成19年度で終了している。

その後、平成21年度からは「八戸市中心市街地活性化市民ワークショップ」と名称も新たに、主に中心市街地活性化を目的として開催され、都心地区再生市民ワークショップよりも実践・活動を重視していくようになる。

ここでは、都心地区再生市民ワークショップの蓄積を得て、中活ワークショップがどう変化したのか、また、その後、年度ごとにどう変化していくのかを捉えていく。そして、どこでどのように創発が起こっているのかを明らかにしていくことで、「創発の場」がどのような場所であるのか、また、その形成についての何かを得られればと考える。

平成 21～23 年度の中活ワークショップの実施状況及び活動テーマは、下記の表 1～7 に示すとおりである。

＜表 1：平成 21 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ実施状況＞⁽¹⁾

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 21 年 7 月 18 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	テーマの選定、 北原啓司教授の講話
第 2 回	平成 21 年 9 月 1 2 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	グループ分け、 活動内容の検討
第 3 回	平成 21 年 10 月 3 日（土） 13 時 30 分～17 時	ヴィアノヴァ 3 階	グループごとの検討
第 4 回	平成 21 年 10 月 17 日（土） 13 時 30 分～17 時	八戸市公民館 2 階	グループごとの検討
第 5 回	平成 21 年 12 月 5 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	グループごとの検討
まちなかミュージアム フェスタ	平成 22 年 1 月 30 日（土） 13 時 30 分～17 時	天聖寺ホール	基調講演、 パネルディスカッション
第 6 回	平成 22 年 1 月 31 日（日） 10 時～14 時 30 分	市庁別館 2 階会議室	まとめ

＜表 2：平成 21 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ活動テーマ＞⁽¹⁾

	グループ	内容
1	まちに「来る」	利用者本位の交通環境の提案を前提として、自動車以外のバス、自転車、徒歩などの手段を利用して街に来ることや、街での過ごし方（会所場など）について検討する
2	まちを「アピールする」	街の魅力をアピールするため、これまで一般的に知られている魅力のほかに、なかなか気づくことのない各個店の魅力や街の居場所を紹介するなど、様々なメディアを使って、街中のアピールの仕方や、プロモーションをする作戦について考えていく。また、そこでは本ワークショップの活動もアピールしていく。
3	まちに「仕掛ける」	街の中で、高校生を含むいろいろな世代が関わることのできる、ものづくりやイベントの実施など、街にさまざまなことを仕掛けることについて検討していく。

4	まちを「飾る」	街の景観づくりとして、ワークショップメンバーの「おっせかい」を通して、街をさまざまに飾る（緑化やイルミネーションなど）ことについて、検討していく。
---	---------	---

【平成 21 年度中活ワークショップの流れとその変化】

平成 21 年度の中活ワークショップは、ワークショップ日程での活動がメインであり、その中身は主にテーマについての検討、まちに出て調査、まちにでて企画の実施である。4 つのテーマグループに分かれて以後、ワークショップ終了まで 4 つの形を保って活動していた。メンバーは、ほぼ固定である。また、グループのファシリテーターには、mmws のメンバーが入るなどしてワークショップが進められた。主な内容は以下の通りである。

<第 2 回中心市街地活性化市民ワークショップ>

グループでの 1 回目の活動ということで、どのグループも自分たちがこれから街で何をしていくのか、街にどのように関わっていくのかということについて話しあった。

まちに「来る」グループでは、公共交通のあり方やまちに「来る」理由や動機についての意見出しを行い、今後の方向性として、それらの意見を踏まえた上で街での活用に関する提案をつくっていくための活動を行っていくことが決まった。

まちを「アピールする」グループでは、何をアピールするのかについて話し合い、八戸東高校生が街に関心を持って撮影したビデオ映像をベースに八戸の魅力を発信していくことが決まった。

まちに「仕掛ける」グループでは、自分たちが街でやりたいことを意見としてだし、それらの内容について話し合った。次回はそれを実施するための検討をしていく予定である。

まちを「飾る」グループでは、最初にまち歩きをし、そこで見たものや感じたことを意見として出し合った。また、その意見の中から「びっくりマーク」や植物で八戸を飾っていこうという提案がでた。

<第 3 回中心市街地活性化市民ワークショップ>

グループでの 2 回目のワークショップでは、前回話し合われた意見をもとに、それを活動に移していくための内容の肉付けや、活動するための方法などが話し合われた。

まちに「来る」グループでは、「ポイントカード」「中心市街地回遊循環バス」「自転車置き場を増やす、バスに載せる」「バス利用者への特典」の 4 つの提案について、その内容を具体的に話し合った。活動のイメージは未定としたが、今後の予定として提案のニーズ調査や肉付けを行っていくとした。

まちを「アピールする」グループでは、「ネタを作る」「イベント取材する」という 2 つの活動の柱を決め、それらを実践する方法として、テレビや動画、紙媒体を使用したいという意見がでた。今後の予定も組まれ、「まちなかフェスタ」で披露したいという目

標も決まった。

まちに「仕掛ける」グループでは、前回出された意見などをもとに「まちなかお店めぐりツアー」「ランニング&ランニング喫茶」「毎月〇日はゴミ拾いの日」「空き店舗に若者チャレンジャー」「まちなか文化祭」「八戸の味コンテスト」の 6 つの企画を練り、その実施に向けた方法などについて話し合った。

まちを「飾る」グループでは、「びっくりマーク」を 1 つのシンボルとした制度やイベントなどの動きを 8 つの項目でまとめた。

<第 4 回中心市街地活性化市民ワークショップ>

グループでの 3 回目のワークショップでは、実際に自分たちで街にでて活動するグループが現れた。21 年度のワークショップは、第 1 回目の北原啓司氏（弘前大学 教授）の講和にあった「私が中心市街地に関わる」ということを重視して行われている。これまで、テーマに沿った提案だけを主に考えて活動してきたグループは、この回で、その提案をもとに自分たちが街で何をしたいのかについてもう一度話し合い、それを実行に移せるように予定をたてた。

まちに「来る」グループでは、関係機関に提案する 5 つの項目について検討した。前回の提案を踏まえて、「中心街地循環バス」「ラックバスの導入」「バス利用者への特典」「中心街ポイントカード」「ポータルサイトの設置」について話し合われた。今後はアンケートを実施し、その結果を反映させたものを提案としてまとめていくこととなった。

まちを「アピールする」グループでは、実際にワークショップ活動に関する撮影が行われ、youtube などでの発信ができないかどうか検討した。

まちに「仕掛ける」グループでは、お店巡りツアーとまちなかランニングが実施された。実際にやってみることで反省点や次回に活かしたい点などがいくつか浮かび上がり、さらにお店巡りをしながらマップをつくるという新しい活動の提案がでた。

まちを「飾る」グループでは、自分たちで実際にどんな活動に取り組んでいくかということについて長期的な取り組みと短期的な取り組みに分けて話し合われた。

<第 5 回中心市街地活性化市民ワークショップ>

グループでの 4 回目のワークショップでは、ただ机を囲んで話し合うだけではなく実際に街で活動するグループが多くなった。ワークショップ外での活動もみられることから、積極的に街中に関わっていく機会が増えている。また、他のグループとの連携も視野に入れた動きが見られるようになった。これまで、テーマごとにそれぞれで活動していたグループが街の中で活動を展開することによってつながりを持ち始めた。

まちに「来る」グループでは、ワークショップメンバー等に提案についてのアンケートを実施した。また、ポータルサイトについてホームページのイメージなどを作成し、今後はまちを「アピールする」グループとの連携も考えている。

まちを「アピールする」グループでは、朝市や中心市街地のお店の取材が行われた。情報の発信については、youtube や GIS が再び検討され、その他に街なかの各所でゲリラ上映会を行うといった意見もでた。また、サイトへのアクセス向上のための QR コードをバス停や広報はちのへに掲載するといった意見がでた。

まちに「仕掛ける」グループでは、ワークショップ前にまちなかゴミ拾いとお店巡りという企画を実施し、今後は地域の人も巻き込んでその輪を広げたいとした。マップづくりについては、既存のマップについて検討し、どのようなマップを作っていくか意見を出し合った。まちなかランニングは、ワークショップ以外での実施が検討されていたがメンバーが集まらず中止となってしまう、今後はまちまで競争という企画として再びその可能性を探りながら実施にむけて意見をだしあった。その他の企画についても実施にむけて話し合われた。

まちを「飾る」グループでは、一度きりのイベントで終わるものではなく半永久的な街づくりをしていきたいということから街を香で飾るという意見がでた。飾るものは金木犀という植物である。また、前回の話し合われた短期的な取り組みで、自転車のホイールに LED を巻き付けて作ったライトアップの飾りは、ワークショップ後に本八戸駅通りの 4 店舗に依頼して飾ってもらうこととなった（図 1, 2）。今後さらに広めていき、また「！」の形で広げて継続的に飾っていききたいとした。



図 1：自転車のホイールに LED を巻き付けて作ったライトアップの飾り



図 2：自転車のホイールに LED を巻き付けて作ったライトアップの飾り

<第6回中心市街地活性化市民ワークショップ>

グループでの最後のワークショップでは、提案書や企画書という形で終わりにするのではなく、次回の活動の予定などが話し合われ、ワークショップが終わっても自分たちで活動していこうという動きが見られた。また、他のグループとの連携を視野に入れるグループも増えた。

まちに「来る」グループでは、前回のアンケートをもとに「思いやりバス」「ラックバス」「バス買い物客へのサービス特典」「深夜タクシー」「深夜定額タクシーバス」「中心街ポイントカード」「アンテナBOX」という7項目で市民提案書を作った。関係機関に対し、来るグループとして提案していくことを決めた。また、アンテナBOXをまちに来るグループで実際に置いてみるということを実施したい。実際に形にしてみようということになった。ポータルサイトについては、他のグループとの連携を視野にコンテンツを提供してもらえれば掲載するとした。

まちを「アピールする」グループでは、実際に youtube での情報発信や GIS の作成が行われた。しかし、取材に計画性がなかったことが反省点としてあがった。学生のメンバーが多く、中心市街地のホームページの更新もそういった学生ができるようになればいいということだった。

まちに「仕掛ける」グループでは、これまでまちなかランニングやゴミ拾いを実施し、知らないお店が多いということに気づき、勝手にミシュランというマップを作成した。今後の改善点としてゴミ拾いの企画も盛り込みながら手書きで分かりやすいものにしていきたいとした。また、マップに暗号を仕掛けるという意見もでて、仕掛けるグループの特性をだしていこうという意見もでた。マップで情報をアピールすることから連携も考えられた。

まちを「飾る」グループでは、これまでのワークショップをもとにビックリ八戸プロジェクトと北限の金木犀の香で街を飾ろうという企画をまとめた。金木犀については、是川で育てている人がおり、実際に見学に行き育て方などを伺った。また、ワークショップメンバーも自分で実際に買って育てている。

全体を通してみて、グループは、企画と提案をするグループと実際にまちで活動するグループに分かれていた。しかし、どのグループのテーマもワークショップが終わったからと言ってゴールできるようなものではない。また、それぞれに検討していた内容もワークショップ内でだけの活動では収まりきらないものであったように感じる。

参加者も、第6回であったように、ワークショップが終わっても自分たちで活動が続けたいこうとしていた。都心地区再生市民ワークショップのテーマに関する検討や議論とは雰囲気が変わり、今回のワークショップからは、実践と活動が重視されるようになった年でもあり、継続的に参加してきた人たちは、最初は戸惑いもあったかもしれない。しかし、回を重ねるごとに、企画を練ることや議論をするだけでなく、どのグループのメンバーもどうやって自分が街に関わるかを考え、そしてそれを実践していこうとしていた。

ワークショップの日程での活動を主に考えていたことで、後に活動がそれではおさまりきらなくなったことから、ワークショップでの活動の仕方、ワークショップのあり方自体が課題となったといえる。

＜表 3：平成 22 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ実施状況＞⁽²⁾

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 22 年 6 月 12 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	北原啓司教授の講話、 「私の思い」の発表
第 2 回	平成 22 年 7 月 24 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	「私の思い」から実現可能な活動の絞り込み、14 のプロジェクト発表、プロジェクトごとに今後の活動予定をたてる
第 3 回	平成 22 年 9 月 18 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	14 のプロジェクトの活動についての中間発表、今後の予定をたてる
第 4 回	平成 22 年 12 月 4 日（土） 13 時 30 分～17 時	市庁別館 2 階会議室	14 のプロジェクトの活動についての中間発表、今後の予定をたてる
第 5 回	平成 23 年 2 月 26 日（土） 13 時 30 分～17 時	八戸ポータルミュージアムはっち 1 階はっちひろば	今年度の活動報告

＜表 4：平成 22 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ活動テーマ＞⁽²⁾

	プロジェクト
1	昭和のストリートカルチャー復活プロジェクト
2	ホコテンキャンパスプロジェクト
3	Dance Dance Dance@ホコテン
4	ホコテンに仕掛ける
5	ゴミ拾い de 三社大祭
6	まちマップ(GIS)づくり
7	内丸でまち歩きをして本八通りのライトアップキャンペーン
8	観光動画
9	心霊スポット
10	のへのバスマと酔っ払いにバス（時刻表）を

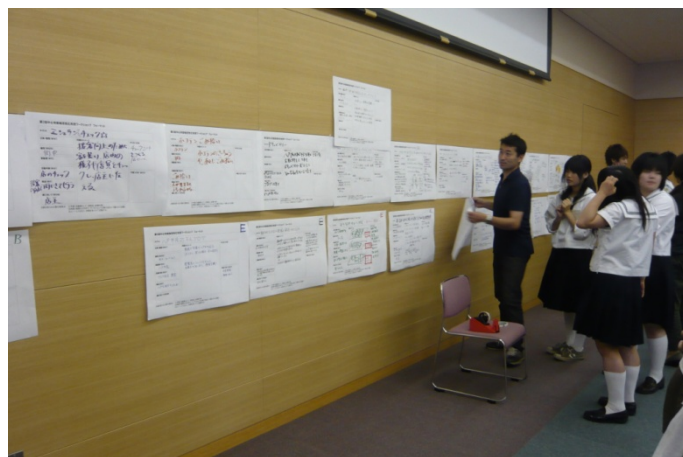
11	まちなかキャンパス in 「はっち」 & 「はっち」 watchers
12	アンテナボックス 2010 とまちに置き傘プロジェクト
13	グリーンプロジェクト
14	のら猫★ミシュラン

<表 5：平成 22 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ活動内容⁽²⁾>

	内容
1	路地のような場所で、昔の遊びを楽しむ。昭和の子どもの路地裏遊びの再現・復活。
2	はちのへほコテンでオープンキャンパス。発表テーマ・・・国際交流で言葉の交流や学校の研究や部活など学校の交流。英語の早口や方言の早口などコンテスト
3	はちのへほコテンでダンス披露。
4	はちのへほコテンでフリマと綱引きをする。フリーマーケットは参加者を募集し実施する。委託の場合、売り上げの 5%。綱引きは 1 チーム 20 名を予定（三日町 v s 十三日町）
5	三社大祭の前にまちなかでごみを拾う。ほか、イベントの後などにまちなかでごみを拾う。
6	ウェブ上の地図でポイントを作成する。歴史的情報、お店やイベント情報、自転車ロードマップ情報など
7	自主的なまち歩きで地域資源発見をし、地域の活動に参加し交流をする。通りの理解者にライトアップを実施してもらう。
8	QR コード、携帯、youtube などを使い観光動画を発信する。
9	まちの人に心霊スポットを聞き、映像化する。
10	のへのバスマは、目的地と乗車・降車バス停をまとめ、最終バスを記載したバスマップである。酔っ払いにバス（時刻表）をは、まちなかにバス路線が集中しているため、行き先別の最終便を紹介し、飲んだ後の帰りにバスを利用してもらう取組みのこと。
11	まちなかキャンパス in はっちでは、はっちの中に、市内大学生・高専生・高校生が活動できる拠点を作る。はっち watchers では、鉄壁アートの製作見学やアーティストへのインタビュー、はっち完成までの経過を HP のコンテンツとして提供する。
12	アンテナボックスは、学校で配付可能なパンフなどをボックスに入れ、学校の情報等をまちなかでアピールする。まちに置き傘は、リサイクルプラザ、バス会社で不要な傘を提供してもらい、それを傘スタンドに入れて、まちなかで無料で置き傘を設置する。
13	季節に合った花を植える。その後の世話もしていく。

平成 22 年度のワークショップは、参加者の「私の思い」という、自分のまちとのかかわり方を紙に書いて張り出し(図 3)、それをまとめていくことで 14 のプロジェクト(表 4,5)を立ち上げることとなった。これら 14 のプロジェクトの中から、メインとして活動したいプロジェクトを一つ選び、その他にも興味があるプロジェクトがある場合は、サブメンバーとして関わるという形で、所属するプロジェクトを各自が選択していった。平成 22 年度の中活ワークショップでは、毎回プロジェクトごとに活動が行われ、議論するだけではなく、実際に想いを行動に移し、中心市街地にて活動を仕掛けていった。

そして、それぞれのプロジェクト毎にワークショップ日程以外での活動がメインとなり、ワークショップはその活動の報告や次回の予定などを共有する場として活用することとなった。



<図 3 : 「私の思い」>

【平成 22 年度中活ワークショップの流れと変化】

平成 22 年度の中活 WS では、14 のプロジェクトが活動を展開していた。「グリーンプロジェクト」や「のら猫★ミシュラン」、「アンテナ BOX」など、前年度の想いを受け継いでいるプロジェクトもいくつかみられた。前年度から変化した点は、メンバーが気になるプロジェクトにいくつでも参加してもよくなったこと、そしてワークショップが報告や情報共有の場となったことである。昨年度はメンバーをほぼ固定で行っていたのに対し、今年度はメインメンバーとサブメンバーを決め、だいたいの打ち合わせなどは固定のメインメンバーで行い、活動実施日や人数が必要な時などにサブメンバーに助けてもらうなどが行えるようになった。サブメンバーは、気になるプロジェクトがあれば登録し、手伝えるときなどに参加していく。ワークショップで情報共有ができるので、その時に活動予定などを伝え、そして知ることができる。ワークショップがそのような場として定められたことで、メンバーはそれぞれ連絡を取り合い、街の中で場所を見つけて打ち合わせをし、ワー

クショップ以外の日でも積極的に活動を行っていった。また、はちのへホコテンを活動実施日としていたグループがとても多かったのが特徴的であった。

活動を続けていくうちに、「Dance Dance Dance@ホコテン」や「心霊スポット」のプロジェクトは、メンバーが忙しいためか、ワークショップ自体にも参加できなくなり、活動報告が得られなくなったため、どのような活動を展開し、どのような結果が得られたかはわからない。また、「のら猫★ミシュラン」や「グリーンプロジェクト」、「観光動画」のプロジェクトなどは、ワークショップの終了とともに、活動を終えた。平成22年度のワークショップで動き出した14のプロジェクトのうち半数以上は、ワークショップ終了後にプロジェクトの活動自体を終了した。

これに対して、「昭和のストリートカルチャー復活プロジェクト」は「遊びのプロジェクト」へ、「ホコテンキャンパスプロジェクト」及び「まちなかキャンパス in はっち&はっち watchers」（図4、5、6）は「学びのプロジェクト」へ名前を変えて平成23年度のワークショップで継続して活動を展開していく。また、「内丸でまち歩きをして本八通りのライトアップキャンペーン」や「のへのバスマと酔っ払いにバス（時刻表）を」のプロジェクトは単独で活動を継続している。



図4：はっち watchers
「八戸のうわさ」
うわさマンに扮して
まちなかを練り歩く



図5：はっち watchers
「八戸のうわさ」



図 6 : はっち watchers
「八戸のうわさ」

「まちなかキャンパス」の開催

活動状況

平成 22 年 12 月 26 日（日）：打ち合わせ

平成 23 年 1 月 30 日（日）：打ち合わせ

平成 23 年 3 月 7 日：本番（図 7）

まちなかキャンパスとは、14 のプロジェクトのなかの「はっち watchers」と「ホコテンキャンパス」が一緒になって「まちなかキャンパス実行委員会」を立ち上げ、その活動体を中心に仕掛けていくイベントである。今まで別々に活動していたプロジェクトが、ワークショップの情報共有により、「はっち watchers」のはっちという空間で何かしたいという想いと「ホコテンキャンパス」の学びあえる、楽しめる集まりを作り出すという想いが 1 つになって進んでいったものである。

また、まちなかキャンパスの実施にあたって、八戸市内三大学（八大、八工大、高専）と八戸東高校英語部との連携で行っていくことになった。発表者及びテーマは以下の通りである。

成田 梨菜 弘前大学教育学部地域生活学科 4 年

「市民活動における創発的まち育てに関する研究」

白山一樹 八戸工業高等専門学校電気情報工学科 5 年

「WebGIS と携帯電話を用いたまちマップ作成システム」

八戸東高校英語部 リンジー・ニコルソンと英語部員

「Let`s play in English」

板野仁志 八戸大学ビジネス学部 2 年

「八戸大生の“カタリバ”活動について」

若宮祐希・栴本拓磨 八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科 3 年






「コンペでのものづくりの実践」

まちなかキャンパスは、その後、八戸高専地域文化研究センターと学生まち活の体制で
2012 年 2 月 25 日にはっち広場で行われた。

まちなか★ おしゃべりパス



発表テーマ

-  弘前大学教育学部地域生活学科4年 成田梨菜
「市民活動における創発的まち育てに関する研究」
-  八戸工業高等専門学校電気情報工学科5年 日山一樹
「WebGISと携帯電話を用いたまちマップ作成システム」
-  八戸東高校英語部 リンジー・ニコルソンと英語部員
「Let's play in English!!!」
-  八戸大学ビジネス学部2年 坂野仁志
「八戸大生の“カタリバ”活動について」
-  八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科3年
若宮裕希、梶本拓磨 「コンペでのものづくりの実践」

まちなかキャンパス

まちなかキャンパスは、八戸市に関わる様々な学生・市民の発表の場であり、なかなか交流することのできなかった高校・大学間を超えた交流の場でもあります。

発表テーマは、大学での研究、高校での部活動など。自分たちの研究や活動を市民のみなさんへ向けて面白くお伝えします。

日時：3月7日(月) 17:00～19:00

場所：八戸ポータルミュージアム はっち
はっちひろば にて

*参加無料、事前申し込みは必要ありません。
どうぞお気軽にお越しください。

主催：まちなかキャンパス実行委員会
八戸市

協力：学生まち活プロジェクト

まちなかキャンパス実行委員会は、平成22年度中心市街地活性化市民ワークショップの参加者が集まってつくった市民グループです。中心市街地の活性化という大きな目標のために、自分たちにはいったい何ができるだろうと考え、まちなかキャンパスを企画しました。また、まちなかキャンパスは、八戸高専、八戸大学、八戸工業大学の三校連携による「学生まち活プロジェクト」の協力をうけています。

まちなかキャンパスは、楽しみながら互いに学びあうことによる自分自身やまちの成長を目標にしています。知らなかった大学の一面を知ったり、新しいテーマに触れることのできる場として、多くの市民の方の参加をお待ちしています。



お問い合わせ

まちなかキャンパス実行委員会
TEL：080-6035-0714
Email：h-machicam@live.jp

八戸市まちづくり文化推進室
TEL：0178-43-9426
Email：
machi@city.hachinohe.aomori.jp

図7：まちなかキャンパス開催広告

＜表 6：平成 23 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ実施状況⁽³⁾＞

	日時	場所	内容
第 1 回	平成 23 年 8 月 27 日(土) 13 時 30 分～17 時	八戸ポータルミュージアムはっち 3 階 和のスタジオ	北原啓司教授の講和、 4 つのプロジェクトの説明
第 2 回	平成 23 年 9 月 17 日(土) 13 時 30 分～17 時	八戸ポータルミュージアムはっち 3 階 和のスタジオ	3 つのプロジェクトに分 かれて活動、 活動内容の発表と今後の 予定
第 3 回	平成 23 年 11 月 12 日(土) 13 時 30 分～17 時	八戸ポータルミュージアムはっち 3 階 和のスタジオ	3 つのプロジェクトに分 かれて活動、 活動内容の発表と今後の 予定
第 4 回	平成 23 年 12 月 17 日(土) 13 時 30 分～17 時	八戸ポータルミュージアムはっち 5 階 共同スタジオ	3 つのプロジェクトに分 かれて活動、 活動内容の発表と今後の 予定
第 5 回	平成 24 年 1 月 28 日(土) 13 時 30 分～17 時	八戸ポータルミュージアムはっち 5 階 共同スタジオ	今年度の活動報告、今後 の予定

＜表 7：平成 23 年度 中心市街地活性化市民ワークショップ活動テーマ⁽³⁾＞

	プロジェクト	ファシリテーター
1	遊びのプロジェクト	mmws メンバー
2	食のプロジェクト	mmws メンバー
3	学びのプロジェクト	mmws メンバー

＜遊びのグループ＞

もともと、昨年度のワークショップで昭和のストリートカルチャー復活プロジェクトとしてやってきているもので、その時の問題意識というのは、街なかでもっと子供たちが遊べないかというものだった。八戸には色々な路地があり、そこに行くと子供が、意味もなく追いかけてっこをしたり、自転車でぐるぐる回りながらおしゃべりしていたりと、遊びをしているのを見ることができる。こういう八戸の場を活かして、あまりこりすぎないで、色んな遊びを展開できる場をつくっていかうというもの。

<食のグループ>

食のプロジェクトは、昨年度はあまり活動しなかったが、一昨年、その前の年と活動してきている。今回のテーマは、「八戸の昔の年越し料理の再現」である。昔は、正月料理より年越し料理のほうが豪華だったといい、その料理も今作れる人達は少なくなりつつある。正月料理を含む昔からの食文化の発掘、再現することで、あらためて安心・安全な食を見直し、次世代に引き継いでいきたい。まずは、昔の料理を調査し、はっち内に併設されているキッチンを利用し、WS参加者ととも八戸の郷土料理を調理する。

<学びのグループ>

学びのグループは、哲学カフェをやっていく。哲学カフェは、日本各地で行われている。今回、このグループではリラックスした環境で固いテーマについて討論し、また、身近なことを切り口に本質的なテーマを議論することで、成熟した議論を学ぶことを目的とする。日程は、ワークショップのものだが、例えば4回やってそれで終了というものにはしたくない。そこで、ワークショップでない日の活動も考えている。(図8)

例えばこんな感じです・・・

ある土曜日の午後、仲間がはっちに集まり思い思いに陣取った。さあ、「哲学カフェ」の始まりだ。

ものごとはひとりで考えているより、他人の意見を聞きながら、みんなで対話しつつ考えていくほうが、いいアイディアが出たりする。それが哲学カフェのねらいだ。

さっそくファシリテータは今日のテーマを示し、10分ほど話した。この10分間のスピーチは、いわば「基調講演」。哲学カフェは小さな集まりだが、議論の取りかかりには、やはりきちんとしたテーマ設定が必要だ。そこで毎回、その日のファシリテータが出だしにこれを話する。

まずはメンバーの意見を聞く。参加者は次の3つのルールを守ること。「難しい言葉を使わない」「全否定しない」「人の話をよく聴く」。あまりに話題が逸れたときはファシリテータが注意する。

発言が一巡したら自由な討議をする。長くしゃべる人もいれば、短い人もいる。しかしひと言も発言しない人がいてはまずい。ファシリテータは全員の発言に耳を傾けて、あまりしゃべらない人の発言を引き出すようにする。

「通りすがり」の人も大歓迎。気がつけば、この人もメンバーになっていた。

スタートから約2時間、本日のセッションに満足気の人もあるし不満足の人もあるが、お開きの時間が来た。ファシリテータは「哲学にファイナルアンサーはありません。その時々ベストアンサーが得られるだけです」と締めくくった。

図8：哲学カフェイメージ

【平成 23 年度中活ワークショップの流れと変化】

平成 23 年度のワークショップは、ファシリテーターに mmws のメンバーが入り、メンバーはほぼ固定であるが、外からの参加は自由にできることになった。

平成 20 年に誕生した mmws は、始めのうちは mmws が主催するイベントを開催し、平成 21 年度の中活ワークショップへ主要メンバーとして参加するなど精力的に活動をしてきたが、平成 22 年度からは関わりも薄くなり、mmws が主催するイベントなどの活動も行っていない。その後 1 年は、個人的に中活ワークショップへ参加するなど、市役所が開催するイベントの手伝いはしているが、mmws 自らが主催となって企画・運営する活動はしていない。

活動は縮小しながらも、メンバーそれぞれが活動の方向性を探りながら個別で活動してきた。その結果、もともとの出発地点であった、「はっち」を活用しながら、独自の活動を展開するという方向性を再認識した。

mmws は設立後、「はっち」の開館を見据え、これからはっちの活用方法を考えた上での活動を展開していた。「はっち」開館前から「はっち」に関わってきたからこそ、「はっち」は「私たちの場所」という思いが強く、同時に「はっち」を魅力的な場所にしたいという思いも生まれた。このような思いが生まれたからこそ、mmws は、活動の方向を決定し、平成 23 年度のワークショップにも主体的に関わっていくこととなった。(図 9)

「学びのプロジェクト」では、会場を「はっち」にし、「はっち」の公開性を活かして中に居合わせた人たちとともに、身近で固いテーマに関して議論し合うという「哲学カフェ」を企画し行っていた。また、「食のプロジェクト」では、「はっち」内で食堂を運営している mmws のメンバーの下、「はっち」内に併設されているキッチンを利用し、ワークショップ参加者とともに八戸の郷土料理を調理する活動が行われた。さらに「遊びのプロジェクト」では、「はっち」の和室で絵本の読み聞かせを開催し、「はっち」周辺では昔の遊びを子どもたちと体験する活動を行った。(図 10, 11, 12, 13, 14)

ワークショップは今までの積み重ねから、活動してその後に情報交換をする場となった。参加者の活動自体は、ワークショップ日程に縛られることなく自由に行われていた。また、平成 23 年度中活ワークショップでは、mmws の人が活躍し、mmws のメンバー自身もこれからの活動へ向けて自信をつけていった。



図 9 : プロジェクト発表



図 10 : はっち「和のスタジオ」を活用して、話し合いと発表を行う



図 11 : はっち「和のスタジオ」を活用して、話し合いと発表を行う



図 12：遊びのプロジェクト
はっちの周りで実際に子供
と遊んだ活動を発表



図 13：食のプロジェクト
はっち 5 階共同ス
タジオのキッチン
を活用して実際に
昔に料理をつくる



図 14：学びのプ
ロジェクト
はっちの中で場
所を見つけて、哲
学カフェを開催

第2節 まち育てワークショップで起きた創発

ここで、もう一度創発とは何かを思い出したい。創発とは、多くの要因や多用な主体が絡まり合いながら、相互に影響し合っているうちに、ある時にエネルギーの向きが一定方向にそろって、当初は思いもよらなかった結果がポンと現出する現象のことをいう。⁽⁴⁾ 創発という言葉は、たくさんの分野でそれぞれに使用されているが、どの分野も共通して持つ創発とそれが起こるプロセスのイメージがある程度見えてきている。國領氏は、『創発は、「自立した個」が「つながり」の中で相互作用を起こすことで、結果として予期せぬアウトカム（結果）が起こり、そのアウトカムが個にフィードバックされるプロセスとなることを想定している。創発とは、この「創発プロセスの中で生まれる新たな価値である」』と述べている。

また、第1章でまち育てにおける創発は「私」がつながり「公」が構築されていく中で、「私」同士の前面に出した思いが相互に作用することで起こると述べた。そして、その意義の1つとして市民活動に新たな動きを生じさせ、持続可能な市民活動へのきっかけとなるとも述べた。

ここまで、平成21～23年度に開催された中活ワークショップの蓄積を載せてきたが、その中では都心地区再生市民ワークショップとはまた違った創発が起きていた。ここでは、そこで起こった創発がどういったものだったのかをまとめていく。

① 「はっち」とつながる人

ワークショップ参加者の赤坂美千子氏（里山夢食堂 代表）は、平成16年度の都心地区再生市民ワークショップの頃から、平成23年度に至るまで継続的にワークショップに参加している方で、ワークショップで「私」の想いを前面にだして活動していく中で、「はっち」とのつながりができ、「はっち」の中で食堂を開くこととなった。そして、ワークショップが終了しても、「はっち」との連携で料理教室など新しい活動を実施している。「はっち」で食堂を開くことは、きっと最初は考えてもいなかったことだろうし、さらに、「はっち」との連携での活動も行っていくようになったこともそうである。

この、つながりから新たな展開が起こったということが創発である。赤坂氏がワークショップを続けていく中で、「はっち」とのつながりができ、「はっち」に関わる人との相互作用によって新たな展開が起きた。そして、ここでの創発は、赤坂氏の活動を発展させる形で、「はっち」でも活動を続けることを可能にした。

同じくワークショップ参加者の柳沢拓哉氏（八戸ポータルミュージアム「はっち」 コーディネーター）は、平成16年度の途中からワークショップに参加し、その後、継続してワークショップに参加している。ワークショップの初めころから、「はっち」とのつながりを意識し活動を続けていた。そして、「はっち」とのつながりができ、「はっち」のコーディネーターとして働いていくこととなる。「はっち」とのつながりを意識しながら活動は

おこなっていたかもしれないが、まさか職員として「はっち」で働くことになるとは思ってもしなかっただろう。

ここでの創発は、柳沢氏の思いが「はっち」や「はっち」に関連する人と結びついて、それが作用していく中で、職員になったこと、そこでの新たな仕事や活動につながっていたことである。

赤坂氏も柳沢氏も、ワークショップを続けていく中で、たくさんの「私」と意見をぶつけあいながら、「はっち」とのつながりを持ったことで、そのつながりと「私」の思いが作用して創発を起こした。

② まちなかキャンパスの開催

平成 22 年度の事例で、先にも述べた「まちなかキャンパス」は、元々、2 つの別々のグループ「ホコテンキャンパス」と「はっち watchers」が、ワークショップでつながり、そこから「まちなかキャンパス実行委員会」を結成して行ったイベントである。この活動には筆者自身も当事者として参加している。

「ホコテンキャンパス」というグループでは、学び合える、楽しめる集まりを作り出すという目標で活動をおこなっており、「はっち watchers」というグループでは、「はっち」ができればこんなワクワクした取り組みが行われてほしいという思いを活動にして行ってきた。この 2 つグループの思いが、ワークショップという情報共有の場で重なり、お互いに協力しながらまちなかキャンパスを実施しようという話になり新しい活動体が誕生することとなった。(図 10,11)

ここでの創発は、そもそも、別々の活動で、他のグループと一緒に活動することはそれまで視野になかった者達同士が、ワークショップという場でつながり、新たな活動としてまちなかキャンパスが行われることになったこと、そして新しい活動体が誕生したことである。



図 10：まちなかキャンパス打ち合わせ



図 11：まちなかキャンパス

③ 哲学カフェの新たな展開

平成 23 年度の中活ワークショップで学びのプロジェクトとして実施された、「哲学カフェ」が、そのワークショップ終了後も「てつがくカフェ」という名称で持続的に活動を行っている。平成 23 年度の活動状況と平成 24 年度の実施状況は下の表 8,9 に示す通りである。

<表 8：平成 23 年度 哲学カフェ実施状況>

	日程	場所	テーマ
第 1 回	平成 23 年 8 月 27 日 (土) 13 時 30 分～17 時	はっち 3 階 リビング 3	3.11 は八戸になにを 教えたか
第 2 回	平成 23 年 9 月 17 日 (土) 13 時 30 分～17 時	はっち 3 階 八庵	豊かさとはなにか
番外編 哲学カフェ	平成 23 年 10 月 22 日 (土) 13 時 30 分～15 時 30 分	はっち 3 階 八庵	わたしたちは、いま、 幸福ですか？
第 4 回	平成 23 年 11 月 12 日 (土)	はっち 3 階 和のスタジオ	～郷土に生きる～ 私の居場所
第 5 回	平成 23 年 12 月 17 日 (土) 13 時 30 分～17 時	はっち 5 階 共同スタジオ	情報過多社会を生きる
第 6 回	平成 24 年 2 月 26 日 (土) 13 時 30 分～17 時	はっち 5 階 共同スタジオ	わたしたちの言葉は 力を持っているか

<表 9：平成 24 年度 てつがくカフェ実施状況>

	日程	場所	テーマ
第 1 回	平成 24 年 7 月 28 日 (土) 13 時～15 時	はっち 4 階	功利主義を考える
第 2 回	平成 24 年 8 月 15 日 (土) 13 時～16 時	はっち 5 階 共同スタジオ	公共哲学でまちを考え る

「哲学カフェ」(図 12) は、平成 23 年度のワークショップ終了と伴に終了することなく、「てつがくカフェ」という名称で mmws 主催により、その後も活動を持続して行っていく(図 13)。

そのことで、mmws としての活動に新たな影響を与えた。また、「てつがくカフェ」は平成 24 年度の活動で八戸自由大学との連携で活動を行うことで、新たなつながりを作りだした。そして、その後の活動に新しい展開が開けるなど、創発を誘発し続けている。

第3節 持続可能な市民活動と創発の場の形成

第2節で述べた創発を少しまとめながら、「創発の場」の形成についての考察を行っていく。1つめが、ワークショップという場とそこでの活動で「私」と「はっち」が繋がったことで起こった創発、2つめがワークショップ内でグループ同士がつながることで起こった創発、3つめがワークショップで育った「私」が、ワークショップが終了しても想いを前面にだしながら自ら活動を進めていく中で、mmwsや「はっち」、大学や行政とつながっていくことで次々に誘発されていった創発である。

1つめについては、ワークショップでの活動を通して「私」と「はっち」が繋がったことで創発が起きた。「私」同士のつながりについて、「人」と「人」のつながりだけではなく、このように、「施設」と「人」が繋がったことで創発が起こったことから、それは、「はっち」の持つ意味が何か作用したからだと考えられる。

八戸ポータルミュージアム「はっち」は、その名前からもわかるように「ポータル（入口、玄関口）」機能を施設の使命として持つ。八戸の文化・観光・食・歴史などを凝縮して魅力を伝えるとともに、一刻も早くそこから飛び出して、実際に自分で見に行く・聞きに行く・体験しに行くための玄関口である。また、それ以上に施設内は「偶然のつながり」を促進する公開性の高さが特徴とされている。施設にはいると、自分の目的以外の活動を目にする・耳にする・触れるといったことが起こる。そして、市民団体相互や、観光客と市民、アーティストと市民、高齢者と中高生など、異なる世代、立場の人間と出逢い、交流し、触発される機会が施設内に仕掛けられている⁽⁵⁾。

このように、「はっち」は多様な人が訪れる場所であり、人と人がつながる仕掛けをいくつも持っている施設である。そして、「はっち」とつながるということは、そのまま人とつながるということを意味する。つまり、赤坂氏も柳沢氏もワークショップを通して「はっち」とつながったことで、多様な人とつながることのできる場所とつながり、そして創発が起こったのである。また、このことから「はっち」が創発を促す場としての機能を持つという可能性があることがわかった。

次に、2つめについて考察していく。第1章の都心地区再生市民ワークショップでのmmwsの事例と創発にいたるまでの流れは違うが、ワークショップ内で創発が起こったことで、活動に新たな展開が生じたという点が似ている。そもそも、別々の活動をしていたグループであり、もしワークショップが情報共有の場として機能していなければこの創発も起こっていなかったかもしれない。つまり、2つのグループの『「はっち」で何か活動したい』という想いが重なる場、ぶつかる場としてワークショップがあったからこそ創発が起こったといえる。このことから、まち育ての考えが根付いたワークショップの場も、創発を促す場としての可能性を持つといえる。

最後に3つめについて考察していく。ワークショップでたくさんのことを学びながら育った「私」が、ワークショップが終了してもその想いを前面にだして、「てつがくカフェ」

という活動を続けていく。そして、まち育ての考えが根付いたワークショップで学んだことを受け継いだ活動や団体が、「てつがくカフェ」のような創発を促す場所としての意味を「はっち」に持ち込んで、そこで創発が起きている。その時につながったのが、mmws、大学、行政、そして「はっち」という空間である。これまでの市の事業としてのワークショップは終了しても、「てつがくカフェ」を続けていくことで、そこで創発が起こっていることから「てつがくカフェ」という新たな「創発の場」が形成されてきていると考えられる。

これまで見てきたなかでも、創発が生起してそこから生まれたものに同じ事例はなかった。創発は、何が起こるかわからない。それは、人々の連携であったり、活動の分裂であったり、価値観の変化だったり、まったく新しい何かの誕生だったりと思いがつかないものだ。第1章のまとめでは、まち育ての中で創発が起こることで、結果として市民活動の持続性を促すことにつながった。また、第4章の八戸市の事例からも、創発が起こったことで持続的に、あるいは今までの活動を活かして新しくそして発展的な活動を始めている例もでていた。そして第2、3章では、市民が次の活動を期待できるように、躍動感をもって活動を持続していくためには創発を促す場の形成が必要だと述べた。持続可能な市民活動を育てていくためには、やはり創発を促す場、「創発の場」が必要である。

これまで見てきたものから言える「創発の場」とは、第一に創発を促す場でなくてはならない。そして、「私」の想いをぶつけられる場であり、「私」同士がつながることのできる場であり、想定外のことが起きてそれを受け入れることのできる場であり、柔らかなつながり・ネットワーク的なつながりを広げていくことのできる場であるといえる。

しかし、何が起こるかわからない、想像もしていないようなことを起こすこのような創発を意図的におこしていくことができるのだろうか。この問いに、國領二郎氏（慶應義塾大学 SFC 研究所所長）は、

そもそも、創発というのは作為のないところにしか生まれないもので、意図をもって創発を生み出そうとしたり、ましてやそれを利用したりしようとするのは、まったくの心得違いなのかもしれない。また、仮に生み出すことが可能であったとしても、それを人間の都合のいいように制御することは不可能であることも考えられる⁽⁴⁾。

と述べている。しかし、その後

創発を直接的に生み出したり制御したりすることは不可能だが、「創発を誘発するような空間」を設計したり、作りこんだりすることは可能⁽⁴⁾

という仮説を立てて研究を進めている。このことから、創発を意図的に生み出すことは不可能かもしれないが、創発を促す、または誘発するような場を形成することは不可能では

ないということが伺えた。

第 5 章では、創発の場の形成について、その可能性のあるものについて、これまでの章でのまとめとヒアリング調査をもとに考察していく。第 4 章では、「創発の場」として「はっち」「ワークショップ」「てつがくカフェや mmws」などが機能し、これらを「創発の場」として捉えてきた。第 5 章では、すでに形成されつつあるこれらの「創発の場」の今後の展望についても述べていきたい。

参考文献・HP

- (1) 八戸市. (2010. 4. 14). 平成 21 年度中心市街地活性化市民ワークショップ
(<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,28559,18,html>). 2013. 1. 20 取得
- (2) 八戸市. (2011. 8. 11). 平成 22 年度中心市街地活性化市民ワークショップ
(<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,43128,18,html>). 2013. 1. 20 取得
- (3) 八戸市. (2012. 5. 24). 平成 23 年度中心市街地活性化市民ワークショップ
(<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/9,24242,18>). 2013. 1. 20 取得
- (4) 國領二郎. (2006). 創発しようぜ！創発を誘発する空間設計. 國領二郎編. 創発する社会. 日経 BP 企画

Ⅱ．本論

第 5 章 関係性が紡ぐ創発の場の新たな展開

第 1 節 新たな創発の場の形成へ

第 2 節 新たな創発の場の今後の展望

第 5 章 関係性が紡ぐ創発の場の新たな展開

第 5 章では、第 4 章に続き八戸市の事例を基に「創発の場」として機能した場所について、関係者にヒアリング調査を行い、何故そのように機能したのかを明らかにし、これまでのまとめと合わせて「創発の場」の形成について考察していく。ヒアリングについては、対象者に了承を得たうえで録音機器を用いて記録した。

第 1 節 新たな創発の場の形成へ

これまでのことから、「創発の場」として捉えているのは「ワークショップ」「てつがくカフェや mmws」である。また、「はっち」も創発の場の可能性を持っていることから、これら 4 つの場について、どうして、「創発の場」として機能したのか、その理由をもう一度みなおしていくこととする。そのために、これらに関係するワークショップメンバー及び mmws メンバー 5 人にヒアリング調査を行った。

【調査日時及びヒアリング対象者】

ワークショップの変化やそこで生じた創発的事象に関わっていると考えられる、平成 16～19 年度八戸市都心地区再生市民ワークショップ、平成 20 年度まちなか再生市民ワークショップ、平成 21～23 年度中心市街地活性化市民ワークショップの参加者で、mmws のメンバーである 5 人の方たちをヒアリング対象者とした。

日時：2013 年 1 月 16 日（水）

対象：里山夢食堂 代表 赤坂美千子氏

八戸ポータルミュージアム「はっち」 コーディネーター 柳沢拓哉氏

日時：2013 年 1 月 17 日（木）

対象：(株)石万 代表取締役 石橋司氏

八戸大学 教授 田中哲氏

日時：2013 年 1 月 18 日（金）

対象：八戸工業高等専門学校 教授 河村信治氏

*参加者として対象者に毎回ワークショップでお話を伺ってきたが、調査日が 1 月に集中しているのは、八戸市での平成 23 年度中心市街地活性化市民ワークショップ終了後の mmws やてつがくカフェがどのように動いていくのか、またそこで創発が起きうるのかを知るために、調査期間ギリギリまで待って総括的なヒアリングを行ったことによるものである。

また、質問項目は「創発の場」として捉えている①ワークショップについて②mmws に

ついて③てつがくカフェについての3項目について伺った。①ワークショップについては、細かく「参加のきっかけ・目的」「継続理由」「ワークショップはどんな場だったか」「ワークショップの成果・課題」「ワークショップが終了して思うこと」などを伺った。

＜「ワークショップ」が「創発の場」として機能した理由＞

質問項目①についてのヒアリング内容をまとめたものを基に、ワークショップが創発の場として機能した理由について考察していく。

【里山夢食堂 代表 赤坂美千子氏】(図1)

■ワークショップについて

赤坂氏は、ワークショップの参加理由について「平成16年度から参加しました。その後も平成23年度まで継続したのは、ワークショップで学生と色々企画して実施して楽しかったことや、食の活動に入って、八戸のおいしいものとか、昔の料理を紹介したい、そして自分も知りたいという想いがある、食の活動に一生懸命になっていったからです。」とおっしゃっていた。

また、その成果として『ワークショップで料理教室をやった時に参加した人が、つい最近食堂に来て「もう一回やってくれない？」と言われたときは、ワークショップをやっていて良かったと思いました。』と述べている。

ワークショップをどのような場だと考えているかという質問に対しては、「ワークショップは、私なんかよりも年齢が高い人もいれば、もっと下の人もいるし学生もいるから、1つのことに対しても考え方がみんな違う。そういう人達が集まって何か1つのものを作り上げるといったものがワークショップだと思う。それは、情報の場です。大学の教授などと席を一緒にして、ディスカッションできるような場は中々ないです。」とおっしゃり、ワークショップ終了後の展開として『チャンスがあって、「はっち」で食堂を開くことができて、私自身、ワークショップで学んだことを活かして昔ながらの生麴とかそば打ちとかをお客様に声をかけて「やりませんか？」という事業をはっちと連携してやっています。』と述べ、ワークショップで学んだことや、そこで得たつながりを活かして次の新しい活動を始めていることがわかった。



図1：赤坂 美千子氏

【八戸ポータルミュージアム「はっち」 コーディネーター 柳沢拓哉氏】(図2)

■ワークショップについて

元々、NPO の職員だった柳沢氏は、ワークショップの参加について「平成 16 年度の途中から参加しました。そこから継続して参加した理由は、常に八戸のまちを、自分たちも一緒に作っていくことができるから。それができるからワークショップに参加を続けている。」とおっしゃっていた。

また、ワークショップがどのような場だったかという質問に対して「コミュニケーションの促進の場です。色んな人と出会って、それが今も生きていて一緒に付き合っている。」と述べていた。

そして、ワークショップの課題として「中心街と大学が離れているので学生の参加に限界があります。もっと学生が参加しやすい方法があったのではと思います。今までの参加者が mmws という団体をつくってそれぞれに活動しているが、人数は減っている。そして、学生はずっと関わっていても卒業してしまう。そういう意味では、今の mmws のメンバーは「公」の意味でとても、市民参加でまちを考えると意志疎通が図りやすいが、人が絞られて残った人という感じがどうしてもでくる。最初は、ワークショップに何十人も参加者がいたけど、だんだん数が絞られていったことが課題。」とおっしゃっていた。柳沢氏は、課題克服のために、そしてワークショップ本来のあり方を引き出し続けられるような次の活動や企画を考え始めている。



図 2：柳沢 拓哉氏

【榎石万 代表取締役 石橋司氏】(図 3)

■ワークショップについて

後に mmws での活動や「哲学カフェ」をはじめると、ワークショップで学んだことをまちなかで次々に活動として実施してきている石橋氏は、ワークショップへの参加について『平成 16 年度から参加しました。都市政策課から誘われたのですが、「中心市街地のまちづくりで市民の声を聞くことはとんでもないことだ」と、最初は非常にけんか腰で参加しました。当時、地元の町内で公共事業を巡ってのトラブルがあり、商店主や地主、住民などの多種多様な人の間でその意見を聞くことの大変さは知っていたので「そんなに上手くいくはずないよ」という気持ちで参加していました。』とおっしゃっていた。

しかし、そのような中でも継続してきた理由として「最初は皆が初心者でした。でも、やっていくうちに非常に有効だと気付きました。なんのために会議やったのというくらい、本音のない会議を何度も経験してきました。ただ、オフィシャルな場できちんと発言する

のは難しい。でも、ワークショップは5、6人でテーブルを囲んで話すうちに本当の話がでてくる。これは素晴らしいと思ったわけです。」と、ワークショップの有効性を実感したことがその理由だと述べていた。

また、ワークショップがどのような場だったかという質問について「情報の共有の場です。場合によっては同じテーマを人数が多いからテーブルを分けてやったりするので、そうすると同じテーマの話をしているのにテーブルによって随分話が違うというのが最後にわかります。また、非常に大事な仲間ができた。それは、私にとって大事な居場所です。コミュニケーションをとる場というのは簡単に言えば、集まって酒飲んでとか考えられるけど、そういったものを伴わなくても日中に大事な深いコミュニケーションが取れる居場所です。」とおっしゃっていた。



図3：石橋 司氏

【八戸大学 教授 田中哲氏】(図4)

■ワークショップについて

田中氏は、ワークショップへの参加について「平成17年度から参加しました。継続したのは、そういう活動を通していろんなつながりができていく、色んな人と知り合えるからです。それで、自分の付き合いの幅と人間の幅が膨らんでいくというようなところが多分あると思う。」とおっしゃっていた。

ワークショップがどんな場だったかという質問については、「活動を通して、自分自身が成長していく場、あるいは、てつがくカフェでやったテーマ「私の居場所」みたいに、1つの自分の居場所を見つけるための場所。」とおっしゃっていた。



図4：田中 哲氏

【八戸工業高等専門学校 教授 河村信治氏】

■ワークショップについて

河村氏は、ワークショップの参加について『平成 16 年に学生の引率のような形でワークショップに来ました。最初は参加者ではなく、その後ろにいました。参加者として入ったのは 17 年度からです。ファシリテーターについて市民活動で役所がファシリテートするとダメだと考えていました。落とし処の決まった WS になるからです。だから「違うんじゃない」と言って参加していくことになりました。』とおっしゃっていた。

また、ワークショップがどのような場だったかという質問に対して「ワークショップというのは、実践も含めての継続的な動きとして、元々工房という意味ですから、絶えずつくっていくものです。それを皆で参加型の会議的なとらえ方とするのは、結構せまいとらえ方です。継続的に物をつくっていく、つまりそういう場であったり仕組みなのです。」「対立しても、興奮して話しているうちにフツとはじめて、アイディアが出てくることがあったり、そのあと一気に協力的になるなど、そういうことが起こったりします。そこが創発です。あの人はこう考えているっていうことをちゃんと前提として、私とは違うということを知る。でもそこで、あの人の言うことも、ここでうまく考えていったらもっといいものができるかもしれないという発想がでてくると、本当におもしろいことが起こっていく。人間は意外なところでクリエイティブになる。そういう可能性みたいなものに期待してワークショップというものをやる。ワークショップの場の中に創発がある。」とおっしゃっていた。



図 5：河村 信治氏

ワークショップは、その意味として参加型体験グループ学習と訳されることがある。従来の教育で、教える側から学ぶ側への一方通行的な知識伝達型とは違い、ワークショップでは、双方向的な「参加型」の学びを大切に⁽¹⁾する。

それは、最初から決まった結末が決められていて、そこに向かって進んでいくといった予定調和ではなく、双方向的だからこそでくる想定外のアウトプットが歓迎されるものである。

また、ヒアリングより、八戸市で開催されてきたワークショップは考えの違う人がいるのが前提であり、そのような人達が集まって本音で話あいながら 1 つのことを作り上げていくための仕組みであり場であったことがわかった。また、ヒアリングをお願いした方たちのほとんどがワークショップの場としての意味を、情報の共有の場やコミュニケーションをとる場として考えていたことがわかった。そして、ワークショップ活動をしていく中で情報を共有しコミュニケーションをとることで「私」同士のつながりができていく。ま

た、河村氏は「対立しても、興奮して話しているうちにフッとはじめて、アイデアが出てくることがあったり、そのあと一気に協力的になるなど、そういうことが起こったりします。ワークショップの場の中に創発がある。」と述べていた。

これらのことから、ワークショップが創発の場の可能性を持っているというより、ワークショップの本質が創発の意味、自立した個がつながりの中での相互作用により予期せぬ結果を起こし、それを受け入れていくような場と意味を持っているので、ワークショップは、そもそも創発の場であるといえる。

<「mmws」が「創発の場」として機能した理由>

質問項目②についてのヒアリング内容をまとめたものを基に、mmws が創発の場として機能した理由について考察していく。

【柳沢氏】

柳沢氏は mmws の活動について、『2012 年 12 月に「てつがくカフェ」や、今後の八戸市の中心市街地活性化基本計画について話し合った。今後も、そういった形で、タイミングで、mmws をやっていきたい』と述べていた。

【石橋氏】

石橋氏は mmws の活動について、「ブリッジング型でありたい。皆がバラバラに行動していても、1つのテーマがあれば、それに向かって色んなところから集まってくる。そういう形でありつづけたい。そして、NPO みたいな形で進めるつもりはない。」とおっしゃっていた。また今後の展開として「6 月にてつがくカフェの大きいのをやる。そのために資金が必要で今考えている。でも、それがとても楽しい。」と述べていた。

【田中氏】

田中氏は mmws について、「イベントやるために組織を作ったのではなくて、最初のワークショップの次にまたこういうことやりましょうと言って、それを実行委員会形式で実施していくことになり、皆でまとまった結果できたもの。それから、ツアーが始まって、mmws はそういうツアーをやるという話で誕生した。そして、創発を生み出していく土台です。街を活性化していくものとかイベントが、mmws の中から作りだされてきている。それがあって、発展・展開していく。」とおっしゃっていた。

<「てつがくカフェ」が「創発の場」として機能した理由>

質問項目③についてのヒアリング内容をまとめたものを基に、てつがくカフェが創発の場として機能した理由について考察していく。

【石橋氏】

石橋氏は、てつがくカフェについて「てつがくカフェ参加メンバーが、自分の地域で会社で家庭で、細胞分裂みたいにして始めてくれる。そういうものになっていきたい。課題はメンバーの固定化。新しい人をどう入れながらやっていくのかです。」とおっしゃっていた。

【田中氏】

田中氏は、てつがくカフェについて、「てつがくカフェは、ワークショップという形式はとってないけど、1つのテーマに対して物事を深く考える、よく考えるというくせを市民がつけるという場として、創発的なものを生み出す場です。決して、あそこで決めたことを皆でやろうねという場ではない。そしてこれが、街なかで行われているということがすごく大事です。おそらく、mmws がワークショップという場から今度はてつがくカフェという居場所を見つけて、そこを新しい創発の場としようとしていると思う。誰に言われるでもなく mmws という組織として、例えば役所に言われたとか役所が補助してくれるとかという行政との関わりあいというところは抜きに、自発的に市民が動き始めているといえる。そして、ワークショップの代替品じゃないけど、mmws 自身が創発の場になってきている。」とおっしゃっていた。

「mmws」や「てつがくカフェ」は、ワークショップでたくさんのことを学びながら育った「私」が、ワークショップが終了してもその想いを前面に出して、創発現象として活動を持続してく事例である。また、そこは大学や行政、市民活動同士がつながることのできる場であり、想いをぶつけることのできる場でもある。

そして、ヒアリング調査から、八戸市では、ワークショップが一昨年前に終了したが、今度は「mmws」が「てつがくカフェ」という居場所をみつけ、そこを新たな創発の場にしていこうとしていることが伺えた。また、「mmws」自体が創発を促すような、誘発するような集まりであり、場であるという可能性もあることがわかった。

今まであったワークショップは終了しても、「mmws」や「てつがくカフェ」を続けていく上で創発が起こっている。このことから、まち育てワークショップで学んだことを受け継いだ「私」やその活動や団体が、ワークショップの代替場所ではないが、居場所を見つけて、育てて、そして想いをぶつけあい、実際にそこで創発が起こったからこそ、それらが創発を促す場所としての意味を持ち始めたといえる。

これらの理由から、「mmws」と「てつがくカフェ」が創発の場として機能したといえる。

<「はっち」の「創発の場」としての可能性>

【赤坂氏】

赤坂氏は、「はっち」について『ワークショップのつながりから、「はっち」に入り、ワークショップで学んだことを活かしてお客様に声をかけて料理教室みたいなこと「やりませんか。」という事業を「はっち」と連携してやったりしています。』とおっしゃっていた。

【柳沢氏】

柳沢氏は、「はっち」について、『「はっち」ができる前は、市民団体に「はっち」についての意見を聞く会をやったりしたから、その人達ももっと街づくりに絡めたい。「はっち」で、市民団体と街をつなげていけると思う。』とおっしゃっていた。

「はっち」は、多様な人が訪れる場所であり、公開性も高く人と人がつながる仕掛けをいくつも持っている施設である。また、「はっち」とつながるということは、そのまま人とつながるということを意味する。自分とまったく立場も世代も違う人とつながることができる場が「はっち」であり、それが創発を促す大切な役割をもつからこそ、「はっち」は「創発の場」の可能性を持つといえる。

また、「はっち」は、まち育てワークショップで学んだことを受け継いだ活動や団体が頻繁に出入りする空間でもある。ヒアリングから、そこで、「私」が想いを出しながら他の「私」とつながっていかうとしていることがわかり、「はっち」は創発を促す場所としての意味を持ち始めているといえる。

参考文献

- (1) 中野民夫. (2001). ワークショップー新しい学びと創造の場ー. 岩波書店.

III. 結論

Ⅲ.結論

本研究では、①まち育てにおける創発がどういうものなのか、②それが持続可能な市民活動にどのような影響をもたらすかの 2 点について知るために研究を始めた。そして、先行研究から、市民活動の継続性と創発の関連性が浮かび上がり、そこから次の仮説をたてた。「市民参加型のまちづくりから、市民主体の新しい活動体が誕生し、その後の持続的に活動が行われていったことに関して、それが、創発が生じたことに対しての結果である」と、「持続可能な市民活動には、ワークショップや養成講座の中で多様な人が相互に刺激し合うことで起こる創発と、ワークショップや講座が終わった後も活動を育てていくための仕掛けとして創発の場の形成が必要である」の 2 点である。

創発とは、多くの要因や多用な主体が絡まり合いながら、相互に影響し合っているうちに、ある時にエネルギーの向きが一定方向にそろって、当初は思いもよらなかった結果がポンと現出する現象のことをいい、「自立した個」が「つながり」の中で相互作用を起こすことで、結果として予期せぬアウトカム（結果）が起こり、そのアウトカムが個にフィードバックされるプロセスを持つと想定されている。

それを踏まえた上で、まち育ての創発とは、「私」がその想いを前面に出しながらも、相互につながっていき、「私」同士のつながりが「公」として構築されていくなかで創発が起こるというプロセスを持っていることがわかった。そして創発は、何が起こるかわからなくても、想定外のことが起こってもそれを歓迎することのできるまち育ての考えが根付いた場所でこそ起こるといえる。

2 つの仮説については、第 1 章と第 2 章の中で証明された。そこから、創発の場の必要性が取り上げられ、創発を促すことのできる場とはいったい何で、それは故意に形成できるものなのかなどを次の章から調査していった。

これまでのことから、創発の場とは、創発を促す場でなくてはならないといえる。そして、「私」の想いをぶつけられる場所であり、そのような「私」同士がつながることのできる場であり、想定外のことがおこってもそれを受け入れることのできる場であり、柔らかなつながり、ネットワーク的なつながりをひろげていくことのできる場である必要がある。

そして、実際に創発が起こり、「創発の場」としての可能性がある「はっち」「ワークショップ」「てつがくカフェや mmws」について、関係者にヒアリング調査を行い、「創発の場」として機能した理由を考察した。また、その結果から実際に「創発の場」を形成していくことができるのかについてさらに考察していった。

ヒアリング調査からわかったことは、ワークショップが創発の場の可能性を持っているというより、ワークショップの本質が創発の意味を含んでいるので、ワークショップはそもそもが創発の場であるということ。そして、「てつがくカフェや mmws」は、mmws のメンバーや市民がそこを自分たちの居場所として発見し、育てて、想いをぶつけあっていることから創発を促す場所としての意味を持ち始め、また、そこを新しい「創発の場」に

していこうと考えているということ。「はっち」は、まち育てワークショップで学んだことを受け継いだ活動や団体が頻繁に出入りする空間であり、そこで、「私」が想いを出しながら他の「私」とつながっていこうとしていることから、創発を促す場所としての意味を持ち始めているということがわかった。

創発の場は、先に創発を促す場でなくてはならないと述べた。そしてそこは、「私」の想いを前面に出していけるような場所であり、そのような「私」同士がつながることのできる場であり、想定外のことがおこってもそれを受け入れることのできる場であり、柔軟なつながり、ネットワーク的なつながりをひろげていくことのできる場である。

そこに、もう1つ、「持続可能な市民活動を育成していく場」という意味を加えて「創発の場」を定義したい。市民の活動がイベント的に終了してしまうのをこれまでも何度か見てきた。創発の場であるはずのワークショップの中での活動も、ワークショップが終了すると活動自体がなくなってしまうことが多く、市民活動を持続的にやっていくことがどれだけ大変かということは身をもって知ってきた。しかし、八戸には私の知っている中でも、創発の場がいくつか重なりあいながら形成されていこうとしている。重なり合いながら形成されていくことで、よりネットワーク的なつながりも広く太くなると考えられる。

そのような、創発の場の影響で広く太くなっていくつながりが、市民の活動を必要な時にサポートし、お互いに助け合いながら活動していくことで、持続可能な市民活動を育てていくことができる。こうして、「私」同士の関係性が紡いでいく創発の場は、その関係性を柔らかいまま、でもより広く太くしていくことができる。

まち育てにおける創発は、持続可能な市民活動の育成につながる。まち育てにおける創発は、ネットワーク的な関係性を構築し、その関係性は創発の場を紡いでいく。市民活動は、このネットワークと繋がることでサポートし合える関係を築いていくのである。

しかし、まち育てにおける創発は、國領氏が述べている

『創発は、「自立した個」が「つながり」の中で相互作用を起こすことで、結果として予期せぬアウトカム（結果）が起こり、そのアウトカムが個にフィードバックされるプロセスとなること想定している。創発とは、この「創発プロセスの中で生まれる新たな価値である」⁽¹⁾』。

という創発プロセスのイメージとは少し違っている。最初に述べたが、これまで見てきたことから言えるまち育てにおける創発のプロセスとは、ワークショップのような場で、「私」が出逢って、開かれて、繋がって、そして創発の場が形成され、そこで創発が起こる。そして、そこで生まれたものがスピニアウトする。例えばそれは、mmwsであり、mmwsもそこで同じように展開していく。

また、創発を起こした「私」は、さらにその想いを開きながら他の「私」を巻き込んで、場も人も活動も大きく育てていく。國領氏の言う創発プロセスは個にフィードバックす

る関係性を示しているが、まち育てにおける創発は「私」が開かれることで、その後たくさんの「私」を巻き込みながら場も人も活動も育っていく関係性を示しているのである。

このようにして、まち育てにおける創発は、より多くのネットワーク的な関係性を構築し、その関係性は新たにスピニアウトしたものと「創発の場」を紡いでいく。市民活動は、このネットワークとつながることでサポートし合える関係を築き、それが持続可能な市民活動を育てていくことにつながっていく。

参考文献

- (1) 國領二郎. (2006). 創発しようぜ！創発を誘発する空間設計. 國領二郎編. 創発する社会

謝辞

この論文を完成させるために、数々の人々と出会い、そしてお世話になってきました。この場をお借りして心の底から感謝申し上げます。

住居学研究室に入って 5 年、これは、私が八戸に通った年数でもあります。この論文は、八戸の皆さんのご協力があったからこそ書き上げることができました。石橋さんの暖かい言葉、赤坂さんの笑顔には、毎回とてもはげまされました。河村先生、田中先生、柳沢さんにはいつも研究の相談にのっていただきありがとうございました。そして、八戸市役所の皆さんにもワークショップでたくさんのおそわりとても感謝しております。皆さんありがとうございました。

住居学研究室の皆さんには、少し年は離れていても気軽に話にのってもらってととても嬉しかったです。皆さんと話すことで、研究やそのほかのことも前向きに頑張ることができました。

また、研究も授業も一歩遅れて最後にあわてる私ですが、そんなときに隣でペースを崩さず気を配ってくれる同期にはいつも助けられていました。

何よりもそのことでいつもご迷惑をかけているにもかかわらず、笑って「いいよっ」と、言ってくれた北原啓司先生には 5 年間大変お世話になりました。思えば、八戸に行くことが出来たのも、大学院に進むきっかけ持つことができたのも北原先生と出逢えたからです。たくさんの学びの機会を与えていただいたことには感謝してもしきれません。ありがとうございました。

研究をしていく上で、住居学研究室に入って、北原先生のもとで学び、そして八戸に黒石に秋田にとたくさんの得難い出逢いと経験へとつながっていきました。この縁を大切にしながらこれからも生きていきたいと思います。皆さん、本当にありがとうございました。

平成 25 年 1 月 31 日 成田 梨菜